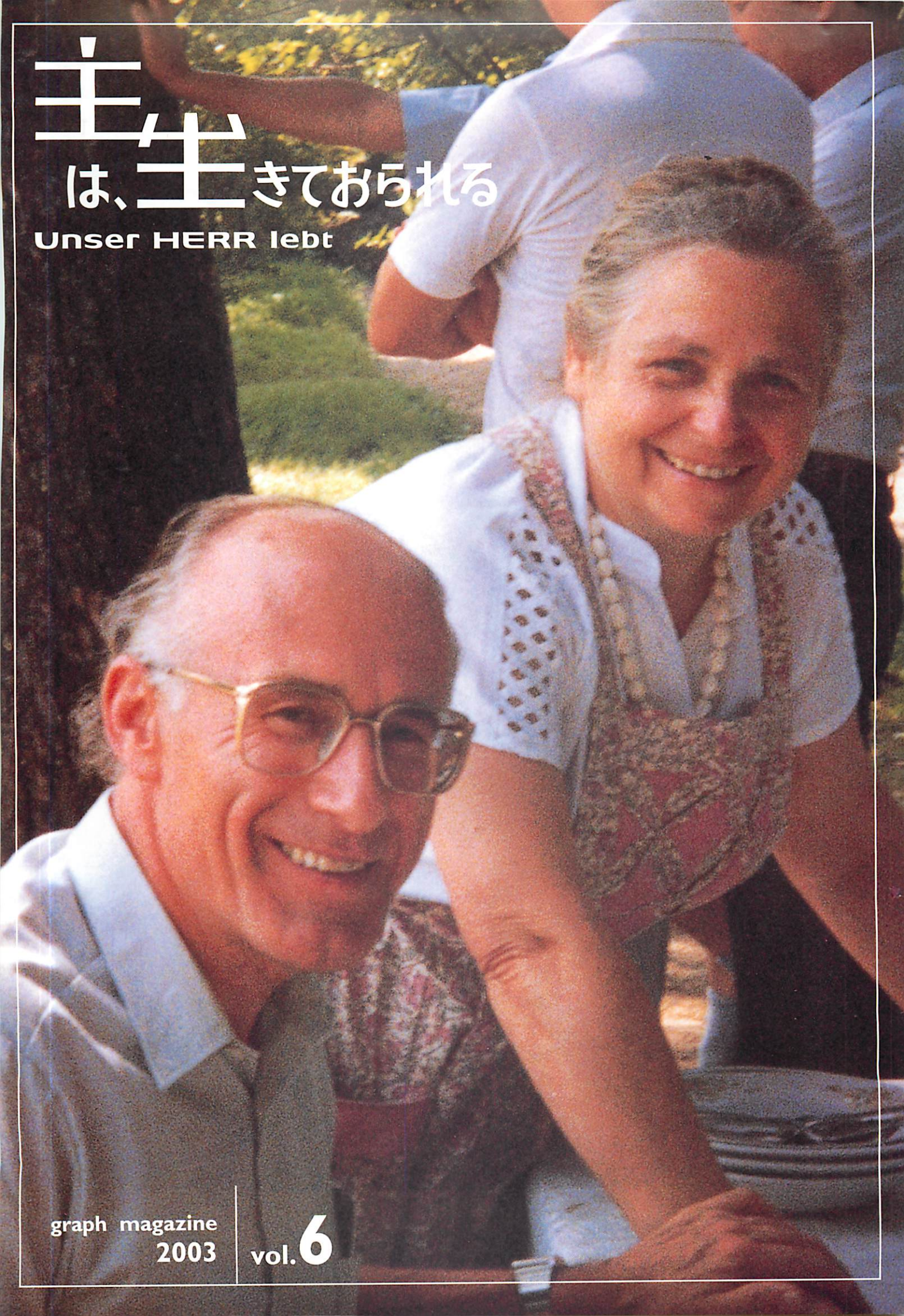
主は、生きておられる

Unser HERR lebt



graph magazine
2003
vol.6

Unser HERR lebt

主は、生きておられる

vol. 6



INDEX

04 特集「ベックさん来日50年」
主に導かれて50年

3人のメッセージ

16 神様が建てられた生ける教会 重田 定義

20 神殿の再建 羽石 真二

24 イエス様がいつも一緒にいてくださいます 黒澤 錬二

26 連載メッセージ 第6回 ［モーセの十戒］
神の聖なる戒め ゴットホルド・ベック

32 キャンプ報告
10年目を迎えたドイツよろこびの集い

5人の証し

34 主から脳梗塞をいただいて 古田 稔

36 家族の救いは主のお約束 水渡 喜久雄（みときくお）

38 イエス様は私にこそ必要なお方 水渡 君子（みときみこ）

40 主のみこころだけがなりますように 吉野 千鶴子／小川 喜代美

42 2003年 10月～2004年 3月 ［メッセージ当番表］

46 子どもたちとの触れ合いから
あおぞらひろば ― いまそこにある危機

48 各地の集会から こちら市川集会で～す

49 結婚・葬儀の報告／祈りの課題

50 おやつにも朝食にもどうぞ
クルミ入りバナナブレッド

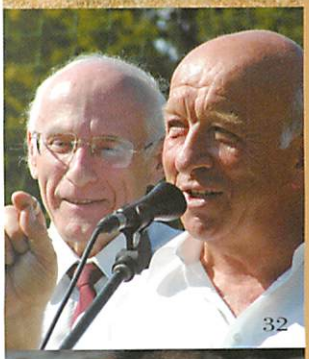
52 本の紹介／キリスト集会へのご案内

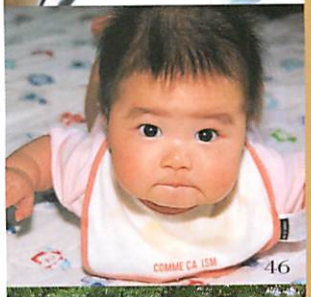
54 全国の集会住所録



04




32



46


48


50

特集「ベックさん来日50年」

主に導かれて50年

主がゴットホルド・ベックさんを日本へ遣わされてから
50年がたちました。
ベックさんによって伝えられた、聖書だけに立った福音は、
主の祝福されるところとなり、
日本はじめ世界の100カ所以上で
家庭集会や礼拝が行われるまでになりました。
これほど多くの魂が救いに導かれたことは、
主の大きなみわざであり、ご栄光の現れです。
また、慣れない日本に遣わされたベックさんの辛苦も
並々ならぬものがあったことでしょう。
8月10日、西軽井沢国際福音センターで開かれた「よろこびの集い」では、
日本における伝道の歩みをベックさんご自身が語られ、
ご夫妻に感謝の花束が贈られました。
ゆりかご時代の集会を知る方々の回想と合わせて、
「来日50年」を振り返ってみました。



来日50年のお祝の花束を手にした
ベックさんとミンヘンさん夫妻（よろこびの集い）

きょうの「よろこびへのコンサート」は「お祝い」であり、一つの「節目」であると言えましょう。まず、ドイツから来られたローゼ夫妻、クラウスとマルグレトさんの結婚50年目の金婚式、私の長女ハイデの夫クリストフの50回目の誕生日、そして、私が日本に来てちょうど50年目にも当たるのです。

この機会に、この50年について、少しだけふりかえってみたいと思います。

まず、はじめにみことばをお読みします。

自分に言いつけられたことをみな、してしまったら、『私たちは役に立たないしもべです。なすべきことをしただけです。』と言いなさい。
（ルカ　17・10）

私は今「自分に言いつけられたことをみな、してしまった」とは、とても言うことができません。この50年間に、私はなすべきことの半分しかできなかった、もしかすると1パーセントしかできなかったかもしれません。というのは、私は主を見上げることを忘れ自分勝手に動いてしまったことがあるし、失敗と後悔の連続だったと告白せざるをえないからです。

確かに、きょうまで50年間、主イエス様を紹介することができたのは言い表わすことのできないほどの恵みであり、特権でした。

使徒パウロは次のように告白しています。「すべての聖徒たちのうちで一番小さな私に、この恵みが与えられたのは、私がキリストの測りがたい富を異邦人に宣べ伝え」（エペソ3・8）るため、と。

人生の目的を知らず、希望もなく絶望している人に主イエス様を宣べ伝えることは、最大の喜びです。しかし聖書ははっきりと、こう言っています。

「わたしを離れては、あなたがたは何もすることができない。」　（ヨハネ　15・5）

この主イエス様のことばはよく知られていますが、このことばを心から信じている人は少ないのではないでしょうか。自分の力、自分の知恵に頼ると、



主にのみ栄光あれ！　ゴットホルド・ベック

主は知らん顔をして何もなさろうとしません。

今から58年前に、主イエス様は私の心の眼を開いてくださいました。家内と知り合ったのもちょうどその頃で、二人とも15歳でした。当時のミンヘンは、きょうも来ておられる妹のエミリエさんから、ある集会に誘われて行っていました。そして、主イエス様が自分の罪のために犠牲になられ、代わりに罰せられたことを知り、提供された罪の赦しを自分のものとしたのです。当然のように、ミンヘンはその時から毎週日曜日に集会へ行くようになりました。私もミンヘンと一緒に行きたいと思ったので、頼んで連れて行ってもらいました。それ以前から、もちろん、私は聖書の内容を知っていましたし、毎日祈っていました。しかし、自分は神に受けいれられており、自分の過ちは赦されている、という確信はまだありませんでした。

当時その集会の責任者でみことばを宣べ伝えていたのは、アイドリンゲン姉妹会のリデアさんでした。彼女は輝いていました。その輝きは確かなもので魅力的であり、また宣べ伝えられるみことばは力あるものでした。

そこで私は、次のみことばによって主に呼びかけられ、招かれました。

「恐れるな。わたしがあなたを贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。」　（イザヤ　43・1）

この時私は、私を贖ってくださったお方、私を捜し出すために来てくださった方、主イエス様をもっとよく知りたい、この主イエス様に従って生きたい、と心から望むようになりました。そして、神学校へ行きたい、宣教師になって外国で主イエス様を紹介したいと強く願うようになったのです。しかし、父に反対されました。父は私が職業をもった方がいいと考えていたからです。

16歳になってから両親と離れて学校の寮に住むようになりました。そこで、学校の近くにいる子供たちを集めて子ども集会をやったり、イエス様を伝える印刷物を配ったりしました。同級生のために学校の中でも集会を開くようになり、ある時から、毎日2回、祈り会をするようになったのです。学校を卒業する頃には、私は、「今から神学校へ行ってわざわざ外国まで行く必要はないのではないか、ドイツにいて子どもと学生たちに福音を宣べ伝えられれば、それでいいではないか」と思うようになっていました。

しかし心の平安がありませんでした。

私の思いと、主のお考えは違っていたのです。私は仕方がなくスイスにあるベアーテンベルグの神学校で学ぶことになりました。神学校には次々と宣教師たちが訪れ、みな自分たちの遣わされた国のことを報告してくれました。そこで私自身は間違いなくアフリカに導かれていると思ったのですが、あるスイスの宣教師を通して別の道を強く勧められました。彼は、「今はアフリカより日本の



初めての軽井沢バイブルキャンプ（よろこびへの集い）

方がずっと大切だ。しかし日本語ができるようになるにはメトシェラ（創世記5・27）の歳とソロモンの知恵とヨブの忍耐が必要だ」と言ったのです。私はそんな日本へは決して行かないと心の中で決めたのです。もちろん、主のみこころに従うため、どこへ行くべきかという導きを求めて祈り続けました。そして1年後、主のお考えは「日本で宣教する」ことだと確信するようになったのです。

イザヤ書30章21節のみことばが、私を導いてくれました。

あなたが右に行くにも左に行くにも、あなたの耳はうしろから「これが道だ。これに歩め。」と言うことばを聞く。　（イザヤ　30・21）

「行きたい」という気持ちはなく、「みこころだから仕方がなく行く」という思いでした。それが50年前のことです。

その当時、宣教団体は日本の地方で伝道するという目的をもっていましたから、私も日本語学校を卒業してから茨城県那珂湊市に住みました。9年間に百数十人の人々が受洗まで導かれるようになり、その中の11人が神学校へ行くことになりました。また、私はその頃最も古い宣教師の一人でしたから、いろいろな委員会に出席することになりました。しかし、そんな委員会に出た後は、何日間も喜びのない状態が続きました。なぜなら宣教団体の考えは、牧師なしに日本での働きはできない、大きな宗教団体に属して活動するべきだ、教会に会員組織を作るのはやむをえない、そうしなければ献金が入らない、などというものだったからです。この方針は、「主にだけ頼るべきだ」という私の信念と大きくへだたっていました。そのころ、私がよく言われたのは、「あなたの言っていることはよくわかるし、それこそが聖書的だ。しかし、日本でそのように働こうと思っても不可能だ、無理だ。うまくいくはずがない」というものでした。

しかし、私は「聖書は時代遅れのものではない。主は、奇蹟を行なう方であり、信頼すると間違いなく主ご自身がご自分の教会を建てられる」と確信するようになったので、宣教団体のドイツ本部に手紙を書いて、「半年後に団体から出る」ことを伝えたのです。

この時、幼い5人の子どもがいました。今日もここに来ている長女のハイデローゼはちょうど7歳で、スーシーは生まれてから3カ月でした。団体から出ると住まいもありません。もしかするとドイツからの送金もまったくなくなる可能性があるとわかっていました。人間的に考えれば、団体から離れることは無謀で、馬鹿気た考えでした。

しかし、家内はその時も心配せず、団体の方針に従うことができなければ団体から出るべきだという意見をもち、主に頼ろうと勧めてくれたのです。聖書にあるとおりです。

良い妻を見つける者はしあわせを見つけ、主からの恵みをいただく。（箴言　18・22）

家と財産とは先祖から受け継ぐもの。思慮深い妻は主からのもの。（箴言　19・14）

地方で伝道することは私たちにとって楽しいものでしたが、宣教団体から出たあと、どこで働くべきか、どこに住むべきなのか、「主よ教えてください」と祈りました。

宇都宮にいたあるオランダの宣教師は、ぜひ宇都宮でいっしょに働こう、と誘ってくれました。それで何度も宇都宮へ行って住まいを探したのですが、うまくいきませんでした。ちょうどその時、東京の世田谷区の経堂集会の責任者から電話があり、「団体から離れて集会といっしょに働きたいと言っていると聞いたのですが、実は吉祥寺に誰も住んでいない古い家があるので、どうぞ無料でよいのでお使いください」と言われたのです。しかし、彼は付け加えて言いました。「そこでは集会を始めない方がいいでしょう。今まで18年の間に6人の宣教師がその家に住んで集会を開いたのですが、導かれ救われた人は一人もいません。住むのはいいけれど、集会は開かない方がいい。できたら経堂まで来て、いっしょに福音を宣べ伝えましょう」と。

ところが、吉祥寺の家の近くに住む三人のご婦人が救われ、大学院の学生たちも導かれるよう



茨城県大洗で



ベックさんの伴奏で歌う松見さん



ミンヘンさんの妹エミリエさん



ベックさんを支えて下さったドイツ集会の最初の兄弟姉妹



古い集会所の前で

になりました。

こうして吉祥寺で集会を始めることになったのですが、その始めから私たちが心から願ってきたことは、「主イエス様が中心になってほしい、自分たちは中心になりたくない、自分たちがいてもいなくても集会はうまくやっていけるようになってほしい」ということでした。確かに初めの頃は、私が司会をしながらオルガンを弾いたり聖書を読んだり祈ったりして、メッセージをしなければなりませんでした。しかし、主は奏楽してくれる娘さんを与えてくださいました。

廃屋のようだった家の屋根も新しくされ、窓も全部新しく取り替えられました。集会所はその後二度増築されましたが、やがて全部壊して今の建物ができました。建て始めたとき、私たちの手元には80万円しかなかったのですが、すべて出来上がったときに借金はぜんぜんありませんでした。実を言うと、3万円不足していたので何とか工面をして払ったのですが、支払いの2週間後に当時会計係だった方が謝りに来られて、献金の3万円がその方のズボンのポケットに入ったままクリーニング屋さんに出されていた、ということだったのです。

田舎で働くことが大好きで、何があっても東京だけには行きたくないと思っていた私は、このようにして、主によって東京に導かれました。もし、宇都宮に住んでいたら、恐らく宇都宮の近辺だけでしか伝道しなかったでしょう。ところが、東京で導かれた大部分の人々は、東京出身ではなく地方から上京して来られた方々でした。私たちは初めから「主はあなたの救いだけではなく、全家族の救いを望んでおられる」ということを強調していましたから、東京で救われた人の家族が住んでいる地方まで、福音が運ばれていきました。その結果として、全国的に集会が増えていき、主の恵みによって主イエス様のものとなった人々は、自分の家族、親戚、知り合いの方々のために祈るようになったのです。

23年前に娘のリンデが天に召されました。そしてこのリンデの死がきっかけとなって、当時の多くの集会の方々が、「自分のためではなく、主イエス様のために生きたい」と心から望むようになったのです。もし永遠に残る実がなければ、人生とは一体何なのでしょうか。リンデの心からの願いは「主イエス様への道案内になりたい、イエス様のために実を結びたい」というものでした。「がん」という人間的にはまったく望みのない状態、真っ暗な闇の中に置かれていたにもかかわらず、リンデは次のように確信していました。

「主イエスこそが私の必要としているお方です。たとえ闇の中にいても、主イエスは私の光です。何一つ望みがなくても、主イエスは私の希望です。苦しみの中にあっても、主エスは私の喜びです。主イエスの他には何物をも、いかなる人をも必要としません」。

リンデのそばで私は祈りました。「主イエス様、リンデはあなたのために実を結ぼうと望んでいたのですが、今はもう何もできなくなりました。どうか、今から私を用いてください。実がなったら、それは私のものではなく、リンデのものにしてください。そうすることが安全だからです。なぜなら、リンデは自分のために何もほしがっていないからです。すべての栄光と誉れはあなただけのものになるからです」。

過ぎ去った50年間、主は本当に私の願うところ思うところのすべてに応えて豊かに恵んでくださり、七つの贈り物を与えてくださいました。

その一つは、多くの主にある兄弟姉妹の皆さんです。

日本全国、北海道から沖縄まで、さらにグアムにも、バンコクにも、上海にも、またアメリカ、そしてカナダにも、主をほめたたえるようになった方々が大勢おられます。「主よ、人間をとる漁師にしてください」という祈りは聞き届けられたのです。

二つ目に、主は、主にある兄弟姉妹を与えてくださっただけではなく、同労者たちをたくさんお与

えになりました。現在、みことばを宣べ伝えている方々は、185人います。ほとんどの人が、仕事をしながら主イエスを伝え、紹介する者となったのです。犠牲なしにはそれはまったく不可能です。皆さんは、交通費も自費で行きます。でも、主が祝福してくだされば、これこそ素晴らしい恵みなのではないでしょうか。

最近、聞くところによると、多くの若い牧師たちが失望し、牧師を辞めていくそうです。また多くの宣教団体でも、宣教師が65歳になると定年になり本国へ帰らなければなりませんが、新しい宣教師を送ることが経済的理由から問題となっているようです。

このような中で185人もの同労者が与えられたのは、神様の恵みそのものとしか言えません。もちろん、その夫人方も同じ犠牲を払っているのです。イエス様の元へ導かれる人々の大部分は集会の姉妹方を通して案内されるだけではなく、アフターケアをするのも姉妹方です。

長野県御代田の西軽井沢国際福音センターも主からいただいた贈り物です。どうしてこの福音センターができたかというと、主ご自身が働かれたからです。主ご自身が集会の方々の心を動かして、主のために犠牲を払いたい、主の犠牲になりたいという思いを起こされたのです。これも恵みそのものです。

これまで、悩みを抱え重荷を負っている多くの人々が、福音センターで紹介された主イエス様を信じ、解放され、人生に新しい目的と意味をもつように変えられました。主は本当に素晴らしいお方です。決して失望させられることのない救い主です。

四つ目に集会のいろいろな合唱団も主からの贈り物です。すべては計画したのではなく、知らないうちになっただけです。恵みとはそういうものです。メサイアでは300人近い集会の皆さんが歌ったり、楽器を演奏したりします。未信者として参加された方も、そこで主に出会って救われた者となって、共に主にのみ栄光を帰したいと願うようになっています。

五つ目に「日々の歌」という新しい賛美の歌集も、主が与えてくださった贈り物であり恵みです。「日々の歌」は、聖書のみことばだけに基づいて、十字架、救い、よみがえり、再臨などへの、私たちの心からの感謝と祈り、賛美が歌われています。感謝しながら心から歌う「日々の歌」が、本当の意味で主に対する私たちの毎日の感謝の表われとなり、主イエスへの崇拝の導き手となるように願っています。

六つ目に今まで出版された多くの本も、別に計画したものではなく、主からの恵みの贈り物です。100万冊以上の本が印刷されるようになり、その中で600人を超える集会の方々が主を紹介し、証しをしています。また集会の兄弟が書いておられるメッセージ集も大いに用いられていることも、主の考えられない恵みの表われです。天国へ行ってからはじめて、主はいかに働かれたか、本をいかに用いられたかがわかるでしょう。

七つ目に、「実を結ぶいのち」という本も10カ国語に訳され出版されました。これも誰かが計画したことでも何でもなく、そうなっただけです。つまり、これこそ主の恵みです。

ドイツでももう何度も増刷されていますが、また近いうちに出される予定です。ローゼさんの話によると、そのために1万900ユーロ必要だそうですが、ぜひお祈りください。

ここでもう一回言いたいのです。すべては、自分の考えから出たことではありませんでした。主が働かれたからそうなっただけです。すなわち恵みとはそういうものです。

あなたがたは、互いに罪を言い表わし、互いのために祈りなさい。いやされるためです。義人の祈りは働くと、大きな力があります。エリヤは、私たちと同じような人でしたが、雨が降らないように祈ると、三年六か月の間、地に雨が降りませんでした。そして、再び祈ると、天は雨を降らせ、地はその実を実らせました。

(ヤコブ　5・16～18)

祈ると実になるのです。しかしこの実も、ただ主の恵みでしかありません。

そこでサムエルは一つの石を取り、それをミツパとシェンの間に置き、それにエベン・エゼルという名をつけ、「ここまで主が私たちを助けてくださった。」と言った。

(1サムエル　7・12)

ヨハン・セバスチャン・バッハは作曲し終わると、先ずラテン語で“Soli deo Gloria!、つまり、「主にのみ栄光あれ」と書いたそうです。

パウロも言いました。

どうか、私たちの父なる神に御栄えがとこしえにありますように。アーメン。(ピリピ 4・20)

私たちもパウロのように言いたいものです。

どうか、世々の王、すなわち、滅びることなく、目に見えない唯一の神に、誉れと栄えとが世々限りなくありますように。アーメン。

(1テモテ　1・17)

使徒パウロは刑務所の中で、主の恵みによって導かれ救われた兄弟姉妹に書き送ったのです。

私の神は、キリスト・イエスにあるご自身の栄光の富をもって、あなたがたの必要をすべて満たしてくださいます。(ピリピ 4・19)

愛する皆さん、これこそが私たちの経験でもあります。「私の神はキリスト・イエスにあるご自身の栄光の富をもって、50年間私たちの必要をすべて満たしてくださいました」。

Soli deo Gloria!　主にのみ栄光あれ!

聖書が言っているように、また私たちも心からそう言いたいものです。

イエス・キリストは私たちを愛して、その血によって私たちを罪から解き放ち、また、私たちを王国とし、ご自分の父である神のために祭司としてくださった方である。キリストに栄光と力とが、とこしえにあるように。アーメン。

(黙示録　1・5, 6)

さあ、主に向かって、喜び歌おう。われらの救いの岩に向かって、喜び叫ぼう。感謝の歌をもって、御前に進み行き、賛美の歌をもって、主に喜び叫ぼう。主は大いなる神であり、すべての神々にまさって、大いなる王である。

(詩篇　95・1～3)

来たれ。私たちは伏し拝み、ひれ伏そう。私たちを造られた方、主の御前に、ひざまずこう。

(詩篇　95・6)

私の福音とイエス・キリストの宣教によって、すなわち、世々にわたって長い間隠されていたが、今や現わされて、永遠の神の命令に従い、預言者たちの書によって、信仰の従順に導くためにあらゆる国の人々に知らされた奥義の啓示によって、あなたがたを堅く立たせることができる方、知恵に富む唯一の神に、イエス・キリストによって、御栄えがとこしえまでありますように。アーメン。

(ローマ16・25～27)

ドイツを出て50年、
その間ベックさんはこまめに、宣教の歩みを
母国へ手紙で報告してこられました。
これらの書簡はすべて、
ミンヘン夫人の妹、
エミリエさんの手許に保管されています。
その手紙から、
日本伝道に踏み出したベックさんの船旅の経験を
要約して紹介しましょう。



1953年8月2日

（私は）ゲヌア（ジェノバ）をオランダ船（Aagtekerk号）で出港、日本へ向かいました。前途への不安などで気が重くなることもありましたが、その時浮かんだ言葉はただ一つ、「主の御名のため」という言葉だけでした。船では一人の修道僧と部屋を共にし、他に6人の女性と5人の子どもが乗っていました。

8月6日

メッシナ海峡やクレタ島を通過して地中海を横断。このときは聖書の（地中海を渡ったパウロの伝道旅行などを記した）使徒の働き、を思い出していました。

8月9日

昨日はシナイ半島を通過して紅海へ入りました。私は大きな喜びに満たされて主を賛美しました。シナイはイスラエルの民の出エジプトの経路ですし、なによりも主の栄光があらわされたシナイ山のある地です。

8月11日

きょうは紅海を通過しました。スエズ運河に17時間、続く暑い紅海の航行を3日間で無事に終え、皆がほっとしました。船で知り合った子どもたちとは毎日、“日曜学校”を開くことになりました。私はそれを喜んでやりました。子どもたちから毎日のように「イエス様の話をして…、イエス様を見せて…」とせがまれたのです。私たちは一緒に祈り、歌い、聖書のみことばを暗記しました。イエス様が早く、子どもたちの心の中に住まれるよう祈っています。

8月23日

インド洋を航海中です。子どもたちとの交わりは、私にとって大きい喜びです。子どもたちはいつも、イエス様の話を聞きたい、と言ってきます。ある日、紙芝居を終えた後、私は4人の子どもがいる、ある家族の話をしました。家族の中でも特に、長男の話をして、そのいたずら坊やの長男が良い羊飼い（イエス様）に見つけられ、その牧者に従っていきたいという思いを与えられ、日本へ遣わされることになったことを話しました。そして、その子は今、日本へ行くこのオランダ船に乗っている、と言いましたら、子どもたち全員が大声で「あなたが、その坊やだ」と叫びました。そのあと、彼らに写真アルバムを見せながら昔のことを話すことができました。

（その後、子どもたちやお母さんはマニラで下船しました。子どもたちは皆、船上でイエス様を愛するようになり、年上の2人は「イエス様に従って行きたい」と決心を告げてくれました。お別れのとき2人の子から接吻され、他の2人からは「私たちのお父さんになって」と言われました。）

航海中に立ち寄ったセイロン島での経験も忘れ難いものでした。

セイロン（スリランカ）では、ある宣教師と小屋から小屋へと歩いて、イエス様の話をしました。人々は目と口を大きく開けて、聴いてくれました。彼らは茶色の肌をし、半裸で、食事は手で食べていました。私は、主の日本への導きがなかったなら、セイロンに残りたいと思いました。訪れた村は、1万人の住民に対して宣教師が2人しかいなかったのです。そして、お坊さんの叩く太鼓の音が一日中ひびく村で滅びに向かっている住民を見て、聖書に書かれている預言者エレミヤの苦しみの叫びが聞こえてくる気がしました。「私の目が涙の泉であったなら、この民の滅びを涙をもって見届けなければならない」と思いました。また「あなたがたは救いの道、希望への道を知りながら、私たちを希望のない状態で死なせるのか」という彼らの訴えが聞こえる気がしました。

（訳：羽石スザンネ）

ベックさんが乗ったオランダ船は、第二次大戦時にアメリカ軍に使われ、何度も改装された老朽船でした。航路の途中、コロンボ港で長く待たされたり、マニラ沖で故障のため立ち往生したりして日本到着は予定を大幅に遅れ、1953年9月17日でした。

「船旅の生活は、日本での伝道活動のための最高の準備になりました。」「すべてにおいてイエス様との深い交わりがあり、これほど祈りの力を感じたことはありませんでした」とベックさんは手紙に書いています。

私が初めて吉祥寺キリスト集会に出席したのは1968年6月半ばごろであった。ベックさんの強い要請を断りきれず、一度きりのつもりが自分の当初の意志に反して、その後今日に至るまで35年間、これまでの人生の3分の2を吉祥寺キリスト集会で送ることになってしまった。

当時の吉祥寺駅近辺は、戦後のバラック建ての小さな店が軒を連ね、雨が降ると舗装のされていない駅前広場は泥んこになるというふうの、また時には2、3人の傷痍軍人が白衣を着て喜捨を募っているというような、あの戦争の硝煙の臭いがまだ微かに漂っているような時代であった。目ぼしい建物もなく、吉祥寺と三鷹周辺で一番高い建物といえば、今の東急デパートの敷地に建っていた三階建ての名店会館であった。すっかり変貌してしまった吉祥寺の街で、当時とあまり変わっていないのは井の頭公園ぐらいではないだろうか。

その頃の吉祥寺キリスト集会所兼ベックさん宅は古い（と言っても、当時の住宅はほとんどが古い、今日からすれば相当に粗末なものであったが、）木造二階建てで、竹などの小さな茂みに面した庭には、数人が談笑できる広さのベランダが設けられていた。私たちはそこでしばしば食事やお茶をご馳走になった。長女のハイデちゃんが12歳、東京オリンピックの年に生まれた末娘のスーシーちゃんが4歳、その間にウスラちゃん、リンデちゃん、そしてビッキーちゃんといて、日曜日など5人がおそろいの服を着て出て来ると、なにか一列縦隊というような感じがしたものだった。ともかく、ベックさんご夫妻はいつもご自分たちの家庭を、訪ねてくる全ての人々に開放し、そのあるがままの、秩序だった、しかし誰もがくつろげる温かい家庭の雰囲気によってクリスチャン信仰の何物であるかを感じさせておられた。ルター的信仰の伝統によって培われたドイツの国民性を表現する言葉と言われる、いわゆるGemütlichkeit（居心地のよさ）とはベックさんの家庭に漂っていたあの雰囲気のことだろう、と私は思っている。

当時の集会の人数は20人にも達していただろうか。しかし、間もなく、元々はアトリエだったという集会用の部屋が狭くなって、拡張することになった。数人の男性信者と共に軽井沢へ行って宣教師の廃屋の木材をトラックで運び、大工さんの信者の助力を得て集会所を改修した。しかし、それも数年後には取り壊して全てを新築しなければならなくなった。一日中、集会所の床を這いずり回りながらカーペットを敷いたり、窓にカーテンを取り付けたり、また庭木を切り倒し、家屋の解体作業を行ったりとか、当時は今から考えると相当にのんびりと牧歌的で、ベックさんもずいぶん肉体労働に精を出しておられた。奥さんのミンヘンさんもまた「穀物をこなしている牛に、くつこを掛けてはいけない」との聖句を引用しながら、肉体労働に従事する男性信者たちへの食事の用意など、つねに十分な配慮を怠ることはなかった。そのような共なる労働を通じての交わりと、その中での様々な体験的教訓は、霊的に稚拙で、ともすると極端な考えや未熟な振舞いに走りがちな私たちにとって、生きた信仰、健全な信仰とは何かを学ぶかけがえのない機会であったと思う。私たちも若かったが、ベックさんご夫妻も人生の折り返し点の40歳前後であった。お二人の指導の下、若々しい力にあふれ、全てが新鮮であり、また皆が幼い信仰ながらひたむきであったあの草創期の小さな集会の有り様は、私にとっては美しく輝

神の慈しみと厳しさ （ローマ　11·22）　蘇畑卓郎



後方左が蘇畑さん

く宝石のような貴重な想い出である。

当初はメッセージはほとんどベックさんがお一人で取り次いでおられたが、しかしメッセージに劣らず教えられることの多かったのは、折に触れて語られる思いがけない言葉であった。それらを通じてまことの信仰の高さ、深さ、また厳しさに触れ、しばしば身震いする思いをしたものである。

誰でもそうだと思うが、みことばの光に照らされ、真実に罪を悔い改めて主に立ち返る時、クリスチャンの信仰の交わりはこれこそ天国ではないかと驚嘆し、歓喜する。眩いばかりの光の国に移されたかのように感じ、クリスチャン全てを天使のように思う。そのような、信仰に導かれてまだ夢うつつのような頃、ある男性信者の言行をめぐってベックさんご夫妻の食堂に呼び出された。その当人と、他に証人としてもう一人の男性信者と私である。その時のベックさんご夫妻の容赦のない厳しい叱責に遭遇して、私は椅子に座ったまま脂汗をかいていた。そして心底、思った。これは大変な所に来たと。クリスチャン信仰は揺るぐことのない真理であり、まことの命であり、確かに至上のものである。しかしこれはまた大変な世界なのだと。その時以来、この思いは全く変わることがない。

ある時、民数記20章の記事を読んで、何故に神はモーセに対してあれほどの厳しさで臨まれたのかを、ベックさんに尋ねたことがあった。この質問に直接には答えず、ベックさんは「現代のクリスチャンにはモーセ以上の責任が負わされている」と言われた。この言葉などは忘れようとも忘れることができない。

集会の責任を負い、尊敬されていた男性信者の一人が度重なる忠告を無視して未信者の女性と結婚した。集会は悩んだあげく、この信者を聖餐式から外さざるを得なくなった。「その兄弟を未信者のように扱え」(マタイ 18·17)との聖書のことばによってである。その時、ベックさんは言われた。「未信者のように扱うことは、これまで以上にあの兄弟を大切にすることです」と。

2000年前、十二使徒をはじめ弟子たちは「信仰の創始者であり完成者である主イエス」と寝食を共にしながら信仰のなんたるかを学んだ。



軽井沢バイブルキャンプ

弟子たちはそのようにして体得した信仰を伝え、それは連綿として極東の私たちにまで届けられたのである。確かに、信仰とは信仰に自らの全存在を賭して生きている人を通してしか本当には学べないのかもしれない。若き日にまたとない信仰の見本であるベックさんご夫妻と出会うことができ、その信仰に直に触れ、生きておられる主の救う力がどのように偉大なものかを身をもって教えていただいたことは、私の人生における最大の幸運、なににも優る主の恩寵であったと思っている。ベックさんの来日50周年に心から感謝しつつ。



日曜学校の遠足



ベックさんの娘さん達と納富信子さんの母、政子さん

奇蹟を見るような歩みでした

納富信子

私は1961年、茨城県大洗で初めてベックさんにお会いしました。来日8年目のときで、ベックさんはすでに3人のお子さん、ハイデちゃん、ウスラちゃん、リンデちゃんをお持ちでした。その3年後の64年11月、青天の霹靂とも言えるお話をうかがったのです。

「ぼくたち、団体から離れることに決めたよ。まだ何もわからないけど、行き先は東京になるかなあ。団体からお金をもらうことを辞めて働きながら伝道するのが一番いいよ。初代教会の人たちはみんなそうだったよ」

驚いて「なぜ」と愚かな質問をする私に「主のみこころに従うのですから責任はイエス様がとってくださいます。心配する必要は何もないのですよ」というお返事。確信の上に堅く立たれているお二人の顔は輝きに満ちていました。

こうしてベックさんご一家は、開拓伝道の地、那珂湊・大洗を離れて東京の吉祥寺に移られたのですが、お住まいはそれまでの宣教師館とは比較にならない粗末な木造二階建て。少し強い雨が降れば、雨漏りでバケツ、洗面器を総動員するような家でした。

ベックさんは早速、早稲田大学や国会図書館でドイツ語のお仕事に従事しながら伝道活動を始められました。そして、夜に開く集会に、若い学生や、近所の主婦の方々が少しずつ集うようになり、驚くほどのスピードでイエス様に救われる魂が増えていきました。本当に奇蹟を見せてくださるようでした。

主はその御目をもって、あまねく全地を見渡し、その心がご自分と全く一つになっている人々に御力をあらわしてくださるのです。

（第2歴代 16・9）

イエス様からの祝福は、物質的な面でもいただきました。借地、借家であった集会所が不思議な方法で集会の所有となり、家屋もコンクリート建てに全面改修されたのです。その陰には、ドイツの集会の方々のお祈りと捧げ物がありましたし、吉祥寺集会に集っている方々の様々なご支援とご協力がありました。

改修工事が始まった頃の集会の人数は、若い信者や主婦の方々が中心の約80人。手持ち資金は約80万円。工事費の見積り額は1階部分だけで1500万円。大きな山が立ちふさがったように思えましたが、「みこころですから必ず与えられる」との確信で祈り続けました。そして、無記名の献金（月給袋そのままの献金もありました）はじめ、ベックさんご一家の仮住まいに新築の家を提供してくださった方、クリスマスプレゼントを辞退して「私たちも」と申し出たベックさんの5人の娘さん、その他うれしい思い出をたくさん残して工事は完了したのです。

在日50年の歩みの中では、愛する娘さん3人を先に天国へ送られることも経験されましたが、それらの試練を乗り越えて、日本人の魂の救いのために寸暇をいとわずに伝道に励んで来られました。その使命感に感謝する言葉もありません。お二人を通してあらわされたイエス様のみ業を賛美するばかりです。



ベックさんの長女ハイデさんと信子さん（フュッセンの街で）

聖書を土台にした主婦の姿、家庭の温かさに触れました

高橋艶子

私が吉祥寺キリスト集会に導かれたのは1968年ですが、当時のことで心に焼き付いているのはベックさんのご家庭の飾らぬ温かさと、ミンヘン夫人の仕える姿です。

たとえば不意に訪れたときでも、まるで家族の一人が帰宅したかのように迎え入れ、手作りのお菓子などをすすめてくださるのです。それが遠慮などつい忘れてしまうほど自然なので、好意に快くつつみこまれてしまうのです。

その頃、ベックさんはミッションの組織から離れて収入がなくなり、学校などで働きながら福音伝道を続けておらました。このため、生活は質素で、アメリカ人宣教師が共同購入した1頭分の牛から骨だけを安くゆずってもらい、それを冷凍庫に保存して毎週スープに使ったり、小諸の農家から安くて良いジャガイモを何キロも分けてもらうなど、倹約に努めていました。しかし、なによりも驚かされたのはミンヘンさんの精力的な家事能力、働きぶりでした。

4人の娘さんが大森のドイツ学園にかよっていたため、起床は毎朝5時半。一人一人の髪を結ってやり、温かい飲み物を用意して6時に送り出した後、ご夫妻で聖書を読み、お祈りをします。8時にご主人が出かけると、5女のスーシーちゃんと二人きりになりますが、その後も仕事は次々に追いかけてきます。

試験や論文のことで尋ねに来る学生、留学の相談に来る大学の先生などに、ご主人に代わって応対し、家事の合い間に日ごとのパンを焼き、お子さんたちのセーターを編み…。集会の人の結婚式があれば、200人を超す来客のためにケーキやクッキーを焼き、食器の用意から会場の花の飾りつけまで、ほとんど人手をかりずにやってのける多忙な一日が始まります。火曜の午後は集会の婦人会の方々と聖書を読み、一緒にお菓子を焼いてお茶のテーブルを囲む。水曜の夜は祈祷会、木曜はドイツ語のバイブルクラス、そして夕食は、ほとんどいつもお客があって10人以上になります。

これだけの仕事をこなしながら、「すべては私の努力でも能力でもなく、神さまの賜物です」と謙虚に語っておられたミンヘンさん。優しさの一方で、母親として娘たちに向かうときの毅然とした態度も強く印象に残っています。

このようなミンヘン夫人を見て感じたのは、今ではある郷愁を覚える女性の様々な美徳——優しさ、勤勉、聡明、つつしみ深さ、従順というものでした。当時、私は「婦人之友」という月刊誌を購読していましたが、その雑誌に書かれていた理想の主婦の姿とミンヘンさんは重なるように思えました。聖書を土台にした主婦、聖書を土台にした家庭とはこういうものか、と深く感じ入ったことを覚えています。そして、そのことは私の信仰の一つの原点になったのです。





ドイツの兄弟姉妹と

古い集会所の前で



ご主人正一さんと艶子さん





洗礼式の後（古い集会所の玄関前で）



軽井沢バイブルキャンプ

痛みで眠れぬ夜も、私たちのために祈っておられた

中村克美

私が吉祥寺キリスト集会に集い始めたのは37年前の1966年1月、最初は大学の先輩に連れて行っていただきました。当時は水曜日の午後7時から8時半まで聖書の学び会があり、日曜日は午後3―5時に礼拝、続いて自由な語り合いの時を過ごし、夕食を共にした後、7時―8時半に福音集会をもっていました。集会所は古い木造の洋館で、集会の部屋は道路に面していました。

集う人数は日によって多少違いましたが、水曜日は15人前後、日曜日は20数人だったと記憶しています。主にベックさんがお話をされて、オルガンも一人で弾いていました。

ベックさんと個人的に話し合う機会が与えられたのは、集会へ行くようになって3日目のことで、その時いただいた名刺に、イエスの僕（しもべ）という肩書きが印刷されていました。その名刺は今も持っていますが、鮮烈な印象として残っています。それ以前に私は数人の宣教師や伝道者から名刺をいただいていましたが、こんな肩書きは初めてです。「福音を恥としない」という決意が伝わってくるようでした。ベックさんにはその後も、いろいろな問題で相談に乗っていただきましたが、最後まで話を聞いてくださった後に決まって出る言葉は「克美は大切ではない、大切なのはイエス様だよ。現実はどうであれ、イエス様だけを見なさい」「今はわからなくても、いつかわかる時が来ます」でした。私の霊的レベルにお構いなく、妥協せず、イエス様だけを見なさいの一本槍の答えに、正直、困惑したことを覚えています。

それから私にとって忘れがたいのは、1972年冬のことです。ご一家で半年ほどドイツに一時帰国し、日本に戻って間もない頃でしたが、旅の疲れもあったのでしょうか、背中の痛みがひどくなってベッドから起き上がれないような状態が続いたのです。そのような中で、「臨時の祈り会を持とう」という声が仲間内で起こり、自由参加で何人かの方が連夜、祈りの時をもちました。その頃、私は目先の現実ばかり見て「これから集会はどうなるのか」「もしかしたらベックさんは再び起き上がれなくなり、ドイツに帰国してしまうのではないか」などと不安にかられていましたが、ある女性の祈りに、自分の不信仰を思い知らされました。その女性は、集会所の一室を借り、ベックさんご一家の最も身近におられた方ですが、祈りの中で、「ベックさんは夜もほとんど眠れない痛みの中で、集会に集っている一人一人の名を挙げて祈っておられます。その声が聞こえてくるんです」「私たちは自分のことしか考えておりません！でも、イエス様はすばらしいお方です……」と涙ながらに言われたのです。本当に恥ずかしい、汗顔の至りの思い出です。



右から2人目が中村さん（軽井沢バイブルキャンプ）

ベックさんとキリスト集会50年の歩み

1953 リーベンゼラ・ミッションの派遣宣教師として9月17日に来日
その後、茨城県那珂湊市で開拓伝道を始める

1955 ミンヘンさんと日本で結婚

1964 ミッションの団体を出て、東京・吉祥寺へ一家で移住
吉祥寺キリスト集会を開く

1968 軽井沢で初のバイブルキャンプ（よろこびの集い）

1974 吉祥寺集会所を改築
家庭集会を始める

1980 3女リンデさん召天

1981 リンデさんの生涯と信仰をつづった「実を結ぶ命」出版

1982 イエス様のもとに導かれた方々の証し集
「光よあれ」第1集発行
初めての地方よろこびの集いを高知で開催

1992 西軽井沢国際福音センター竣工

1994 第1回ドイツよろこびの集（ドイツとスイスのよろこびの集い
参加者は2003年までに3600人を数える）

1996 第1回「メサイア」コンサート（府中の森芸術劇場）

2001 雑誌「主は生きておられる」創刊

2003 歌集「日々の歌」出版



ベックさんご夫妻に記念品が贈られました。

50年にわたって福音伝道に献身してこられたベックさんご夫妻に、記念品を贈って感謝の気持ちを表したい——。こんなキリスト集会有志の思いに国内外の多数の方々が賛同して、寄せられた募金でベックさんにカメラ、ミンヘン夫人には時計が贈られました。

ベックさんは後日、次の文章を寄せてこられました。

私たちこそ多くの助けと慰めをいただきました。

ゴットホルド・ベック

8月の「よろこびへのコンサート」の際は、50年間日本で主を紹介してきた恵みを共に感謝しました。多くの方々から「ありがとう」の言葉をいただきましたが、私たちの方こそ50年の間、多くの助けと慰めをいただき、そのうえすばらしい記念品までいただいて、感謝の気持ちでいっぱいです。

いうまでもなく、50年前に日本に来たとき何も期待しませんでしたし、50年たっても感謝されることは期待していなかったのです。なぜなら私たちだって役に立たない僕（しもべ）に過ぎないからです。にもかかわらず夏の集いで皆さんから感謝され、うれしく思いました。

また、この夏はドイツにいる娘の家族が来日して、子と孫が全員そろって御代田で過ごすことができました。9人の孫たちは互いに知り合うようになり、楽しい時を過ごしました。このこともまた大きな喜びであり、感謝でした。これからも私たちのため、こどもたち、孫たちのために祈り続けてください。

エペソ人への手紙の 1章・15節−23節と 3章14節−21節のみことばを、お互いの共なる祈りにしましょう。

娘さんのご家族と9人のお孫さんに囲まれたベックさんご夫妻



神様が建てられた生ける教会

教会はキリストのからだであり、いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の満ちておられるところです。（エペソ　1・23）

今日はこのみことばから、まことのキリスト教会とはどのような教会かということを、ごいっしょに考えてみたいと思います。

この世には二つのキリスト教会が存在していると言ってよいと思います。一つは「神様がお建てになった御霊に満たされた生ける教会」であり、もう一つは「人間が建てた死んだ教会」であります。これからこの二つの教会について、また御霊のご支配のもとにある生きた教会であるためには、どのような信者を主が必要としておられるかについて、聖書に基づいてごいっしょに考えて行きたいと思います。

神様がお建てになった生きた教会とは、どんな教会でしょうか。それはイエス様を心から主と仰いで従う信者の群れであります。このまことの信者の群れこそがまことの生きた教会と呼ばれるものであります。その群れでは生ける神の御子であるイエス様おひとりだけが中心であり、イエス様だけがあがめられるべき、ほめたたえられるべき、誇るべき、従うべき対象なのであります。したがってこの教会のかしらは、冒頭のみことばのとおりイエス様ご自身であり、イエス様を信じる一人ひとりの信者はイエス様のみからだを構成している群れの一部分なのであります。

イエス様のからだなる教会

このように、神様のお建てになった生きた教会とは、神の御座からこの世に人として来られ、十字架の上で罪を贖ってくださったイエス様を救い主と信じて新しく生まれ変わった人々が、ただ自分の思いだけを中心として生きてきたそれまでの生き方を捨てて、イエス様を自分のかしら、すなわち自分の主人とし、イエス様の人格と結びついて、一人ひとりが神様から賜物として与えられたそれぞれの能力を出し合い、一つの有機体、すな

わち生きたキリストのからだを形成し、その中にイエス様の御霊が満ち満ちているところなのであります。このことはローマの信者に宛てた手紙の中で、パウロがキリストのからだなる生ける教会を私たちのからだにたとえて、たいへんよくわかるように記しています。

一つのからだには多くの器官があって、すべての器官が同じ働きはしないのと同じように、大ぜいいる私たち（信者）も、キリストにあって一つのからだであり、ひとりひとり互いに器官なのです。（ローマ　12･4、5）

またパウロはエペソの教会の信者に宛てた手紙で、このようなキリストのからだなる生ける教会は、イエス様の愛によって一人ひとりの信者が主から与えられた賜物を生かしつつ、一つ一つの器官としてお互いにしっかり結び合わされ、組み立てられることによって成長する教会であると次のように言っています。

キリストによって、からだ全体は、一つ一つの部分がその力量にふさわしく働く力により、また、備えられたあらゆる結び目によって、しっかりと組み合わされ、結び合わされ、成長して、愛のうちに建てられるのです。（エペソ　4･16）

私たち（信者）は、与えられた恵みに従って、異なった賜物を持っているので、もしそれが預言であれば、その信仰に応じて預言しなさい。奉仕であれば奉仕し、教える人であれば教えなさい。勧めをする人であれば勧め、分け与える人は惜しまずに分け与え、指導する人は熱心に指導し、慈善を行なう人は喜んでそれをしなさい。（ローマ　12･6～8）

キリストのからだなる生ける教会のもう一つの特徴は、イエス様を主と仰ぐ信者の一人ひとりが、生きた石として直接イエス様に霊的にしっかりと結びつくことによって教会を形成していることであります。自分自身がイエス様にしっかりと結びついていなければ、イエス様のからだなる教会の一部分になることはできないのです。ペテロは「人には捨てられた石となったイエス様は、神様からご覧になれば尊い生きた石であるように、あなたがた信者も神様からご覧になって生きた石、すなわち一人ひとりの信者がしっかりとイエス様に結びついた者となって、キリストのからだなる教会に築き上げられるようになりなさい」と次のように言っています。

主のもとに来なさい。主は、人には捨てられたが、神の目には、選ばれた、尊い、生ける石です。あなたがたも生ける石として、霊の家に築き上げられなさい。（1ペテロ　2･4、5）

ここでペテロが言っている重要な指摘は、キリストのからだなる生ける教会を築き上げる石には死んだ石は必要なく、イエス様にしっかりと結びついた生ける石が必要だということです。

では死んだ石、生きた石とは具体的にどんな信者を言うのでしょうか。パウロはローマの教会の信者に宛てた手紙で次のように言っています。

肉に従う者（信者）は肉的なことをもっぱら考えますが、御霊に従う者（信者）は御霊に属することをひたすら考えます。（ローマ　8･5）

死んだ石とはこのみことばにあるような肉の思い、すなわちイエス様を信じてもなお、いつまでも自分の自我の思いに従う信者であり、いっぽう生きた石とはかつての自分はイエス様とともに十字架にかけられて死に、新しく生まれ変わって、この世に属する者から主に属する者とされたことをはっきりと認識して、主に従って歩むことを人生の目的としている信者であります。このような信者が御霊に導かれ、主のみことばに従って歩む生きた石なのであります。そして生きた石である限り、その価値は石が大きいか小さいか、また形が良いか悪いか、美しいか醜いかはまったく関係がないのです。御霊に導かれ、みことばに従って歩みたいと心から願う信者だけが、大きさや形や美しさに無関係に、生きた石としてイエス様のからだなる生ける教会を築き上げるために用いられるのであります。

また、生きた教会は生きている証拠に成長します。それは、イエス様のからだを構成する一つ一つの生きた石である信者が御霊に導かれて霊的に成長するとともに、キリストのからだである生ける教会には救われる多くの新しいたましいが加えられ、新しい生きた石としてこのキリストのからだなる生ける教会を構成して行きますから、みからだなる霊の家自体はさらに大きく成長するのであります。

神の建てられた教会の特徴

神様のお建てになった生ける教会は、またイエス様にある平安と喜びが満ちていることを大きな特徴としています。この喜びと平安はいわゆるこの世的な喜びと平安とまったく異なります。それは、ローマ人への手紙の中に、

私たちのために今や和解を成り立たせてくださった私たちの主イエス･キリストによって、私たちは神を大いに喜んでいるのです。（ローマ　5･11）

とあるように、御子イエス様の十字架の贖いによって信じる者をご自分と和解させてくださった神様を喜ぶ喜びであり、ヨハネの黙示録に、

小羊のいのちの書に名が書いてある者だけが、はいることができる。（黙示　21･27）

と記されているように、イエス様のいのちの書に自分の名前が書かれているがゆえに天の御国にはいることが約束されているという喜びであり、またコリント人への手紙第一に、



死のとげは罪であり、罪の力は律法です。しかし、神に感謝すべきです。神は、私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださいました。（1コリント　15・56、57）

とあるように、生まれながらの罪のゆえに神様の律法を守ることができずに死ななければならない人間の最大の敵であるこの死に、イエス様によって打ち勝たせていただいたという喜びなのであります。

また生きた教会に満ちている平安とは、ヨハネの福音書でイエス様が、

わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。（ヨハネ　14・27）

とおっしゃったように、この世の空しい一時的な平安でなく、この世がどんなに騒がしくても揺るがない、恐れることのないイエス様ご自身から与えられた霊的な平安なのであります。そして私たちはこの世のものではないこの霊的な喜びや平安を、神様がお建てになったキリストのからだなる生ける教会の礼拝において捧げられる感謝と賛美の祈りを通して覚え、また生きた石とされたキリスト者一人ひとりの証しを通して、私たちの霊が感動することによって覚えるのであります。

もう一つ神様がお建てになったキリストのからだなる生ける教会の大きな特徴は、生きた石とされた信者の家族や友人が次々とイエス様を信じる者とされることでありましょう。それは、

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。（使徒　16・31）

というみことばの約束が、一人ひとりの信者が愛する家族や親しい友の救いを信じて真剣に祈る、その祈りを神様、イエス様が聞き届けてくださることによって成就するからであります。

人間が建てたキリスト教会

ではこのような生ける教会に比べて、人間が建てた死んだ教会とはどんな教会でしょうか。この教会もイエス様を信じる者の集うところには違いありません。この教会もイエス様をかしらにいただいています。しかし、実際は聖職者と呼ばれる、いわゆるキリスト教の専門家がこの教会の実質的なかしらであり、イエス様はいわば権限のない名誉会長に祭り上げられてしまい、実際にお働きになることができないのです。このように人間が実権を握っている教会は、御霊の導きによって神様やイエス様のみこころを問いながら歩みを進めるのではなく、人間的な組織やルールを作って、それによって運営されます。この教会では、信者はイエス様に聞き従うことを教えられるよりも聖職者や教会のルールに従うことを要求されるので、知識としてイエス様を知ってはいても、イエス様のみこころを問うことも、イエス様に直接結びつくことも知らず、聖職者に顔を向け、主のみことばに頼るのではなく、聖職者の言うことに頼るようになってしまいます。このような教会ではテモテへの手紙第一に、

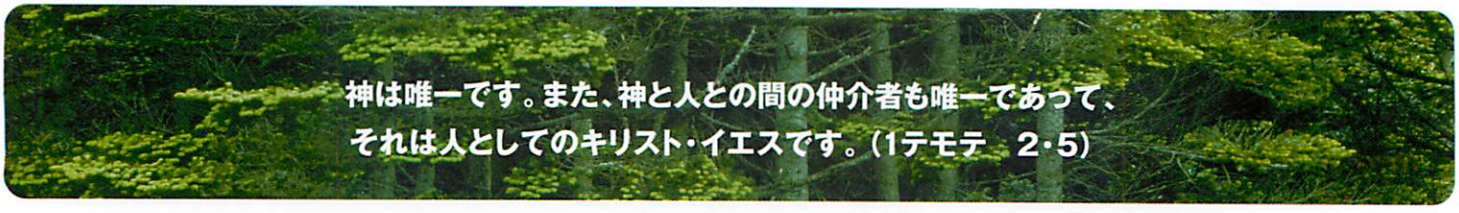
神は唯一です。また、神と人との間の仲介者も唯一であって、それは人としてのキリスト・イエスです。（1テモテ　2・5）

とはっきり記されているにもかかわらず、聖職者たちはイエス様と信者の間に聖職者という仲介者が必要であると自らを定め、その役割を正当化してしまっているのです。

人間が支配するこのような死んだ教会には生きた石は必要ありません。死んだ教会が尊重するのは、神様の愛よりも人間の愛、すなわちヒューマニズムであり、肉の目で見た大きな石、見栄えのよい石、高価な石、すなわちこの世の地位、財産、権力を持っている信者であって、その信者の霊的状態は問題としないのです。またこのような教会では、会堂の壮麗さ、儀式や音楽の荘厳さ、ヒューマニズムに基づく慈善活動などの肉の目で良く見えるもの、この世の人の目に好ましく見えるものによって教会の存在をアピールします。そのような目に見えるものに惹かれたり、満足する信者もいるでしょうが、それは霊的な満足ではなく、肉が満足しているに過ぎず、そのような信者は生ける石とは言えません。そして、たましい、霊が苦しみ、悩んでいる方、たましい、霊が飢え渇いている方がイエス様に会って霊の慰めや救いを得たいと真剣に求めて、人が建てた死んだ教会の扉を叩いても、そこにはイエス様の御霊が働かれないので、たとえ一時的に人間的な愛や、慰めは得られても、求めていたような永遠に続くほんとうの霊の慰めも、いやしも、満たしも与えられず、まして生きる目的や喜びや希望が与えられることはないのです。

サタンの攻撃を受けるのは死んだ教会ではなく生ける教会

人間が建てた死んだ教会をサタンはまったく問題にしません。なぜならこのような教会は霊的には何の力もなく、もはやサタンの敵に値しないからであります。しかし、神様がお建てになったキリストのからだなる生ける教会はサタンにとって大敵であります。その理由は生ける教会はサタンの支配するこの闇の世に、神様のご栄光の光を大きく照り輝かすからです。したがってサタンは何とかして生ける教会を死んだ教会に、神様のお建てになった教会を人間の建てた教会に堕落させようと必死になって攻撃して来ます。初代教会以来の教会の歩んで来た歴史を見ますと、悲しいことにすでに神様がお建てになった多くの生きた教会がサタンの餌食になって死んだ教会に堕落してしまっていることがわかります。ヨハネの黙示録にはその



ような教会をイエス様が嘆かれ、警告している例が記されています。

わたしは、あなたの行ないを知っている。あなたは、冷たくもなく、熱くもない。わたしはむしろ、あなたが冷たいか、熱いかであってほしい。このように、あなたはなまぬるく、熱くも冷たくもないので、わたしの口からあなたを吐き出そう。あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、乏しいことは何もないと言って、実は自分がみじめで、哀れで、貧しくて、盲目で、裸の者であることを知らない。（黙示　3･15～17）

わたしは、あなたの行ないを知っている。あなたは、生きているとされているが、実は死んでいる。目をさましなさい。そして死にかけているほかの人たちを力づけなさい。わたしは、あなたの行ないが、わたしの神の御前に全うされたとは見ていない。（黙示　3･1、2）

これらの教会はイエス様の目からご覧になって生きている教会ではなく、死んでいる教会なのです。

ヨハネの黙示録3章15～17節については、私にとって心の痛む思い出があります。23年前、当時私はある教会に集っていましたが、吉祥寺キリスト集会が生ける教会であることは、すでに先に集会に移った家内や娘の様子を通して、また私自身も何回か様子を見に行って十分わかっていました。しかし、それまで集っていた教会にも人間的な愛着があって、なかなか離れられないでおりました。そのようなとき、毎週水曜日の夜に教会で行われている聖書の学びの箇所がちょうどこのヨハネの黙示録3章15～17節でした。私はこの箇所を読んだとき、これは自分の集っているこの教会が死んだ教会であると主が警告されているのだと示され心が痛みましたが、ある一人の方が「我々の教会はこんな教会でなくてよかった」というような感想を述べたのです。それに対して牧師をはじめ、みなが口々に同意したことに私はショックを覚えました。そしてこのことが吉祥寺キリスト集会に移る最終的な決断をするきっかけになったのです。あのとき、もし、これは自分たちの教会のことであると示されて、みなが心を一つにして悔い改めの祈りをしていたならば、私は吉祥寺キリスト集会に移らなかったかもしれません。

世の終わりが間近い今日、サタンは神様がお建てになったキリストのからだなる生ける教会に激しい攻撃を加えています。その作戦は実に巧妙で、かしらなるイエス様のからだの部分である一つ一つの生きた石を死んだ石に変えて、生ける教会を死んだ教会にしてしまおうとあらゆる手を使って攻めて来ます。具体的には、信者が主だけに心の目を注ぐことを妨げ、人間的な思いによって信者どうしが喜ぶように仕向けたり、あるいは互いにさばき合ったり、憎み合ったりして、信者どうしの間に不一致の思いを起こさせたり、信者がイエス様の御名にご栄光が帰されることに喜びを覚えるのでなく、人間的な栄誉が自分に現されることに喜びを求めるように働いたり、信者が生きた教会であり続けるために熱心に主に祈ることを忘れて、人間的な思いで物事を判断し、行動するようにそそのかしたりするなど、信者の霊の目を曇らせて肉の思いをかきたたせようと、まことに巧妙に働きかけて来ます。

このサタンの攻撃に対して、キリストのからだなる生ける教会が生きた教会であり続けるためにはどうしたらよいでしょうか。まずキリストのからだを構成している一人ひとりの信者が眠ることなく、かしらなるイエス様にしっかりと結びつき、主の御霊に満たされた教会であり続けることができるようにと、絶えず祈り続けることが最も大切であります。そして、御霊の助けと上からの知恵をいただいてサタンの攻撃をするどく見抜く目を与えられ、みことばに堅く立って、一つ一つの問題に賢く対処して行くことが必要であります。聖書に、

あなた（主なる神と御子イエス様）の仰せ（みことば）は、私を私の敵（サタン）よりも賢くします。（詩篇　119･98）

ですから、愚かにならないで、主のみこころは何であるかを、よく悟りなさい。（エペソ　5･17）

とあるとおりです。

私たちが集うキリスト集会は主から遣わされたベックさんが福音を伝え始められてから50年を迎え、現在約4000人が集う大きな集会に成長しました。これはまさに主がなされた驚くべきみわざであり、主のご栄光の大きな現れであります。

私たちは心から主を賛美するとともに、ご自分の国を離れて日本人のたましいの救いのために、今日まで主のみこころに従い通されたベックさんご夫妻の献身に心からの感謝をささげる者であります。しかし、その集会にあって私たちは果たして自分はキリストのからだなる教会を構成する生きた石であるという強い自覚があるでしょうか。もし、ヨハネの黙示録3章15～17節のみことばを自分の信仰の状態であると示されて、御霊の目薬を注いでいただくように祈ることができれば、その信者は生きた石であります。

世の終わりが間近い今こそ、私たち信者は生きた石として、御霊によって一つ心となり、互いに支え合い、祈り合って、滅び行くたましいの救いのための戦いを進めて行かなければなりません。地上にイエス様がご自分をかしらとした生ける教会を建てられ、その構成部分として私たちを召されたのは、そのためにほかなりません。私たちはその目的のために選ばれ、召されたことを心から光栄に思って感謝し、死んだ石ではなく、生きた石としてキリストのからだに築き上げられるように今、自分を吟味しなければなりません。そして意識して霊の目を覚まし、私たちのキリスト集会が御霊のさらなる満たしとお導きをいただく生ける教会であり続けることができるように、ともに心から祈って行きたいと思います。

重田定義
略歴／東海大学名誉教授　府立四中、慶応義塾大学医学部専門部卒、東海大学医学部教授在任中、同学部「医の倫理委員会」委員長を務めた。「私達の国籍は天にあります」など著書多数、東京都出身



神殿の再建

主のために建てる宮は、全地の名となり栄えとなるように大いなるものとしなければならない。（1歴代誌　22・5）

権力によらず、能力によらず、わたしの霊によって。（ゼカリヤ　4・6）

このみことばは紀元前6世紀、バビロンからエルサレムに帰還したユダヤ人たちの指導者であったゼルバベルに対して、主が語られたものです。彼に与えられていた使命は、破壊されたエルサレムの神殿を「主の霊によって」再建することでした。

しかし、ゼルバベルよ、今、強くあれ。――主の御告げ。――仕事に取りかかれ。わたしがあなたがたとともにいるからだ。――万軍の主の御告げ。――あなたがたがエジプトから出て来たとき、わたしがあなたがたと結んだ約束により、わたしの霊があなたがたの間で働いている。恐れるな。すべての国々の宝物がもたらされ、わたしはこの宮を栄光で満たす。（ハガイ　2・4、5、7）

一方で聖書は、主イエスを信じる者に対して次のように問いかけています。

あなたがたは神の神殿であり、神の御霊があなたがたに宿っておられることを知らないのですか。（1コリント　3・16）

私たちも、自らの罪によって完全に破綻したものでした。しかし、主イエスが私たちを贖ってくださり、さらに神の御霊を宿す神殿として私たちを再建してくださるのです。

祈りを聞かれる方よ。みもとにすべての肉なる者が参ります。咎が私を圧倒しています。しかし、あなたは、私たちのそむきの罪を赦してくださいます。幸いなことよ。あなたが選び、近寄せられた人、あなたの大庭に住むその人は。私たちは、あなたの家、あなたの聖なる宮の良いもので満ち足りるでしょう。（詩篇　65・2～4）

一、神殿の特徴

1、主の栄光が現われる

イスラエルの人々は、エジプトからカナンへの旅を続けている間、宿営のたびに幕屋と呼ばれる天幕を組み立て、その中で神を礼拝していました。私たちは、この幕屋に神殿の原型を見ることができます。幕屋は人々の生活の中心でした。そこには、神が常に臨在し、神の栄光が満ちていた（出エジプト　40・34）のです。

神殿が初めて建設されたのは、イスラエルの人々がカナンを占領した後、ソロモンがイスラエルを治めた時代でした。紀元前10世紀のことです。

主のために建てる宮は、全地の名となり栄えとなるように大いなるものとしなければならない。（1歴代誌　22・5）

主の栄光が主の宮に満ちた。（2歴代誌　7・2）

2、祈りが捧げられる

この宮、すなわち、あなたが御名をそこに置くと仰せられたこの所に、昼も夜も御目を開いてくださって、あなたのしもべがこの所に向かってささげる祈りを聞いてください。
（2歴代誌　6･20）

今や、わたしはこの所でささげられる祈りに目を留め、耳を傾けよう。今、わたしは、とこしえまでもそこにわたしの名を置くためにこの宮を選んで聖別した。わたしの目とわたしの心は、いつもそこにある。　（2歴代誌　7･15、16）

3、いのちの水が流れ出る

ソロモンの死後、イスラエルは南北に分裂し、やがて周辺諸国の侵略を受けるようになります。これは、ユダヤ人が神に背いた結果でした。

紀元前6世紀には、バビロン帝国のネブカデネザル王がエルサレムを征服し、神殿を破壊し、ユダヤ人をバビロンへ捕囚として連行しました。その捕囚の民の中に、エゼキエルという預言者がいました。彼は、人々に対して悔い改めを迫り、エルサレムと神殿が主によって再建される日を待ち望んだのです。捕囚から半世紀余り後、バビロン帝国に代わりペルシヤ帝国が世界の覇権を握りました。クロス王はユダヤ人をエルサレムに帰し、町の復興と神殿の再建にあたらせました。冒頭で触れたゼルバベルらの指導によって再建された神殿（第二神殿）は、ローマ軍によって破壊されるまで、約四百五十年間使用されることになります。

彼は私を神殿の入口に連れ戻した。見ると、水が神殿の敷居の下から東のほうへと流れ出ていた。……この川が流れて行く所はどこででも、そこに群がるあらゆる生物は生き、非常に多くの魚がいるようになる。この水がはいると、そこの水が良くなるからである。この川がはいる所では、すべてのものが生きる。……川のほとり、その両岸には、あらゆる果樹が生長し、その葉も枯れず、実も絶えることがなく、毎月、新しい実をつける。その水が聖所から流れ出ているからである。その実は食物となり、その葉は薬となる。
（エゼキエル　47･1、9、12）

二、神殿における出来事

第三の神殿は、紀元前9年にヘロデ王によって建てられたものでした。このヘロデ王は、神を礼拝するためというよりも、むしろユダヤ人の賞賛を得るために、あるいはローマに対して自分の統治能力を誇示するために、この神殿を建設したのです。

この神殿を舞台として描かれている三つの出来事について見てみましょう。

1、悪魔の誘惑

悪魔はイエスを聖なる都に連れて行き、神殿の頂に立たせて、言った。「あなたが神の子なら、下に身を投げてみなさい。『神は御使いたちに命じて、その手にあなたをささえさせ、あなたの足が石に打ち当たることのないようにされる。』と書いてありますから。」
イエスは言われた。「『あなたの神である主を試みてはならない。』とも書いてある。」
（マタイ　4･5～7）

2、宮聖め

それから、イエスは宮にはいって、宮の中で売り買いする者たちをみな追い出し、両替人の台や、鳩を売る者たちの腰掛けを倒された。そして彼らに言われた。「『わたしの家は祈りの家と呼ばれる。』と書いてある。それなのに、あなたがたはそれを強盗の巣にしている。」
（マタイ　21･12、13）

3、パリサイ人の祈り

自分を義人だと自任し、他の人々を見下している者たちに対しては、イエスはこのようなたとえを話された。「ふたりの人が、祈るために宮に上った。ひとりはパリサイ人で、もうひとりは取税人であった。パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私はほかの人々のようにゆする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。』
（ルカ　18･9～12）

パリサイ人は、ユダヤの律法を厳格に守った人たちでした。しかし、彼らが作った細かい規則を守らない、あるいは守れない人々を見下して「罪人」と呼んだのです。

こうした出来事は、私たちの罪について考えさせるものです。私たちは、主なる神の前に誇り高ぶる者となり、悪魔の誘惑に負けて不義とされ、不正に満ちた「強盗の巣」と化してしまいがちな者です。私たちも、かつてのユダヤ人同様、罪によって破綻し、神との交わりを失い、神から遠く離れた所へ捕囚の民として連れて行かれた者です。少なくとも一時的にはそういう者でした。

三、神殿再建の条件

では、私たちが神の御霊を宿す神殿として再建されるための条件とは何でしょうか。

1、主のあわれみを請う

ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。パリサイ人ではありません。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」（ルカ　18・13、14）

取税人は、征服者であったローマ人の下働きをし、しばしば自分自身のためにも金を集めたので、ユダヤ人から盗人として扱われ、嫌われていました。

しかし、主の前にへりくだり、自らの罪を認め、砕かれた心で主のあわれみを求めたとき、主はこの取税人の罪を赦し、彼を義と認めてくださいました。

2、主イエスに聖められる

神殿再建の現場は、安全を確保し、作業の能率を上げるため、主イエスによって聖（きよ）められなければなりません。主イエスは、宮を聖めたように、私たちをも聖めてくださいます。主イエスは私たちのために、次のように祈ってくださいました。

真理によって彼らを聖め別ってください。あなたのみことばは真理です。（ヨハネ　17・17）

3、悪魔の攻撃から守られる

神殿の再建が、悪魔によって妨げられることのないようにしなければなりません。神殿で悪魔の誘惑を退けた主イエスは、私たちを悪魔の攻撃から守ることがお出来になります。私たちはいつも、次のように祈るべきではないでしょうか。

私たちを試みに会わせないで、悪からお救いください。（マタイ　6・13）

四、神の御霊を宿す私たちの特徴

1、主の栄光が現われる

あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現わしなさい。（1コリント　6・19、20）

2、祈りが捧げられる

あなたがたは、自分の持っている最も聖い信仰の上に自分自身を築き上げ、聖霊によって祈りなさい。　（ユダ　20）

3、いのちの水が流れ出る

「だれでも渇いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書が言っているとおりに、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる。」
これは、イエスを信じる者が後になってから受ける御霊のことを言われたのである。
（ヨハネ　7・37～39）

五、神よって完成される神殿

主イエスは、十字架における死とよみがえりについて、ご自分のからだを指して、

「この神殿をこわしてみなさい。わたしは、三日でそれを建てよう。」（ヨハネ　2・19）

と預言されました。よみがえられた主イエスは、今日も私たちの間で生きて働いておられます。私たちは、このよみがえりの主に、神殿の完成をゆだねようではありませんか。

キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。　（ピリピ　3・21）

ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』（ルカ　18・13、14）

羽石真二
略歴／1962年東京生まれ、宇大附中、宇都宮高、一橋大学法学部卒



イエス様がいつも一緒にいてくださいます



わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。（ヘブル　13･5）

「あなた」とは、今この文を読んでいるあなたのことです。これは、イエス様からあなたへのメッセージなのです。全知全能の神であるイエス様が、あなたに一番伝えたいことです。あなたには、そんな愛をいただく資格が、本当にあるのでしょうか。しかし、資格のあるなしは関係ありません。イエス様が、聖書のみことばを通して、無償の愛をもって語りかけておられるのです。いつも私たちから離れず、見守ってくださると語っておられます。

こどもたちが遊んでいる時も、勉強している時も、いつもイエス様が共にいてくださいます。見守られているという実感はないかもしれませんが、必要な助けを与えてくださいます。生活の中で、いやなこと、解決が難しいことに、ぶつかることもあるでしょう。そんな時も、イエス様はいっしょにいてくださいます。そのイエス様に祈り、解決方法を尋ねれば良いのです。どんな時も、イエス様が導いてくださることでしょう。祈った結果、「神様なんていない。」と、思うこともあるかもしれません。自分たちの都合の良い結果に、導かれるとは限らないからです。しかし、イエス様はいつも、一番良い方向へと導いてくださることだけは確かです。

わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、わたしの道は、あなたがたの道と異なるからだ。（イザヤ　55･8）

わたしは、あなたがたに悟りを与え、行くべき道を教えよう。わたしはあなたがたに目を留めて、助言を与えよう。（詩篇　32･8）

おとなも、こどもも、いつも仲良く過ごせるとは限りません。仲間はずれや意地悪などは、よくあるものです。周りの人たちが気づかないこともあります。そんな時、どうしたら良いでしょうか。相手の人をうらんだり、「あんな人がいなければ良いのに。」と思ってしまったりしがちです。しかし、いつも見守ってくださるイエス様がいるのです。つらい時は、イエス様に相談してみるのが良いでしょう。いやな人のことを、イエス様に祈ってみて下さい。その時、相手の人への「祝福」と「救い」を入れてほしいのです。

お互いに親切にし、心の優しい人となり、神がキリストにおいてあなたがたを赦してくださったように、互いに赦し合いなさい。（エペソ　4･32）

自分の敵を愛しなさい。彼らによくしてやり、返してもらうことを考えずに貸しなさい。（ルカ　6･35）

祈ったら、イエス様にお願いしたのですから、あとはお任せしましょう。きっと最善の方向に導いてくださることでしょう。それを楽しみに待ちましょう。

お願いするばかりでなく、祈りを聞いてくださるイエス様に感謝することも大切です。朝には「イエス様。今日一日よろしくお願いします。」夜には、「イエス様。今日一日ありがとうございました。」と、祈りましょう。こうして一日を振り返ると、イエス様が導いてくださったという実感がわいてくることでしょう。

青少年を取り巻く社会環境は、年々悪くなるばかりです。こどもをねらう不審者が増え、犯罪にまで発展することも少なくありません。そのような報道をよく目にします。学校の先生から、安全に注意するようアドバイスされることもあると思います。このことだけを考えると不安になってしまいますが、守ってくださるイエス様がおられます。みなさんがいつも安心して暮らせるように、イエス様は心の平安を与えてくださいます。イエス様からいただく平安以上の安らぎはありません。イエス様に感謝しつつ、誠実に日々の生活を送って下さい。きっとイエス様の愛を感じることができるでしょう。

何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。（ピリピ　4･6,7）

「万軍の主に感謝せよ。主はいつくしみ深く、その恵みはとこしえまで。」（エレミヤ　33･11）

イツモイッショ





黒澤 錬二
略歴／東京都羽村市立羽村第一中学校 教頭
東京都出身
井草中学校、都立井草高、日本大学理工学部卒、同理工学研究科修了



「モーセの十戒」6

神の聖なる戒め

ゴットホルド・ベック

1それから神はこれらのことばを、ことごとく告げて仰せられた。
2「わたしは、あなたをエジプトの国、奴隷の家から連れ出した、あなたの神、主である。
3あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない。
4あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない。上の天にあるものでも、下の地にあるものでも、地の下の水の中にあるものでも、どんな形をも造ってはならない。
5それらを拝んではならない。それらに仕えてはならない。あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神、わたしを憎む者には、父の咎を子に報い、三代、四代にまで及ぼし、
6わたしを愛し、わたしの命令を守る者には、恵みを千代にまで施すからである。
7あなたは、あなたの神、主の御名を、みだりに唱えてはならない。主は、御名をみだりに唱える者を、罰せずにはおかない。
8安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ。
9六日間、働いて、あなたのすべての仕事をしなければならない。
10しかし七日目は、あなたの神、主の安息である。あなたはどんな仕事もしてはならない。―あなたも、あなたの息子、娘、それにあなたの男奴隷や女奴隷、家畜、また、あなたの町囲みの中にいる在留異国人も。―
11それは主が六日のうちに、天と地と海、またそれらの中にいるすべてのものを造り、七日目に休まれたからである。それゆえ、主は安息日を祝福し、これを聖なるものと宣言された。
12あなたの父と母を敬え。あなたの神、主が与えようとしておられる地で、あなたの齢が長くなるためである。
13殺してはならない。
14姦淫してはならない。
15盗んではならない。
16あなたの隣人に対し、偽りの証言をしてはならない。
17あなたの隣人の家を欲しがってはならない。すなわち隣人の妻、あるいは、その男奴隷、女奴隷、牛、ろば、すべてあなたの隣人のものを、欲しがってはならない。」

（出エジプト 20・1～17）

さて、次に第三の戒めをごいっしょに学んでいきましょう。

「あなたは、あなたの神、主の御名を、みだりに唱えてはならない。主は、御名をみだりに唱える者を、罰せずにはおかない。」
（出エジプト 20・7）

この第三の戒めは、「わたしは、あなたの神、主である。」という言葉と密接に結びついています。神はご自身の御名を啓示してくださいました。ですから主は、「あなたは、あなたの神、主の御名を、みだりに唱えてはならない。」と要求することがおできになるのです。

聖書の中における神の御名は、聖なる名前、すばらしい名前として、また神々しく力強く恐ろしい名前として示されています。

「わたしは、諸国の民の間で汚され、あなたがたが彼らの間で汚したわたしの偉大な名の聖なることを示す。わたしが彼らの目の前であなたがたのうちにわたしの聖なることを示すとき、諸国の民は、わたしが主であることを知ろう。」（エゼキエル 36・23）

主の聖なる名を誇りとせよ。
（詩篇 105・3）

私たちの主、主よ。あなたの御名は全地にわたり、なんと力強いことでしょう。あなたはご威光を天に置かれました。
（詩篇 8・1）

「わたしの名が諸国の民の間で、恐れられているからだ。」　（マラキ 1・14）

主の御名のうちに主のご臨在があります。ですから主の御名は主ご自身と同じように聖なるものです。主の御名は主の本質の現われであり、主ご自身の現われです。私たちは恐れをもって、聖なる神、主の前に身をかがめる時にだけ、あえて主の御名を呼ぶことが許されています。

イスラエルの民は、かつて異邦人の偶像崇拝に巻き込まれ、神の御名を汚しました。これこそ、イスラエルの民が70年間のバビロン捕囚を経験しなければならなかった原因でした。このときイスラエルは、神の御名が尊いことを学びました。バビロン捕囚から帰ってきたユダヤ人は、恐れから、もはや神の御名を軽々しく唱えたり、みだりに唱えたりすることをしなくなりました。

今日に至るまで、ユダヤ人は聖書を読む時でさえ、神の名を用いず、口にしないで、御名とか、彼とか、主ということばをその代わりに使っています。

主イエス様は、「（神の）御名があがめられますように。」（マタイ6・9）という願いと祈りを、私たちに教えてくださいました。「御名があがめられますように。御国が来ますように。みこころが天で行なわれるように地でも行なわれますように。」これは、主のみこころです。

天においては、神と小羊の御名があがめられています。ヨハネの黙示録を通して、私たちは、天において神の御名がいかにあがめられているかを見ることができます。

この後、私は、天に大群衆の大きい声のようなものが、こう言うのを聞いた。「ハレルヤ。救い、栄光、力は、われらの神のもの。」
（黙示録 19・1）

神の御名には、すばらしい力が宿っています。主は、アロンと彼の息子たちに、イスラエルの子たちの上に守りとして、主の御名を置くことを命令しました。

「彼らがわたしの名でイスラエル人のために祈るなら、わたしは彼らを祝福しよう。」
（民数記 6・27）

この箇所は、原語を見ると「彼らがわたしの名をイスラエル人の上に置くなら、わたしは彼らを祝福しよう。」となっています。したがって、祝福するとは、主の御名を、誰かある人の上に置くことを意味します。主の御名の守りの下で安全にいることは、ちょうどひな鳥が親鳥の翼のかげで安全なことと同じです。ですから旧約聖書の信者は、神の御名による力をすでに知っていたのです。

たとえばダビデは主の御名に信頼して、あえてゴリヤテに挑戦しました。神の御名はダビデにとって、サウルやゴリヤテの武器よりもはるかに強い盾、また武器だったのです。

ダビデはペリシテ人に言った。「おまえは、剣と、槍と、投げ槍を持って、私に向かって来るが、私は、おまえがなぶったイスラエルの戦陣の神、万軍の主の御名によって、おまえに立ち向かうのだ。」（Ⅰサムエル 17・45）

これはダビデの告白であり、勝利の秘訣だったのです。

詩篇の作者は、証ししています。

私たちは、あなたの勝利を喜び歌いましょう。私たちの神の御名により旗を高く掲げましょう。主があなたの願いのすべてを遂げさせてくださいますように。（詩篇 20・5）

ヘブル人への手紙の11章を見ると、多くの人が主の御名によって、大きな業を成したことがわかります。イエス様は特別の使命をもって、神の御名を告げ知らせるために地上に来られました。主イエス様は十字架につけられる前に、次のように言われました。

「わたしは、あなたが世から取り出してわたしに下さった人々に、あなたの御名を明らかにしました。彼らはあなたのものであって、あなたは彼らをわたしに下さいました。彼らはあなたのみことばを守りました。」
（ヨハネ 17・6）

主の御名は、イエス様を通して生きた目に見える現実のかたちとなったのです。

イエス様は、啓示された神の御名そのものです。罪の力からの贖い、悪魔の力からの解放してくださる最高者の偉大な力は、イエス・キリストの御名のうちに宿っています。

「それゆえ、神は、キリストを高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。」
（ピリピ 2・9）

「すべての名にまさる名」こそ、主イエス様の御名であることがわかります。

「この方以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかには、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。」
（使徒 4・12）

救いはイエス様の御名のうちにあります。主の弟子たちは、イエス様の御名の「生き生きと解き放つ」力を経験しました。彼らはあえて、次のように言うことができました。

「ナザレのイエス・キリストの名によって、歩きなさい。」　（使徒 3・6）

その結果として、生まれつき足の動かない男は、おどり上がってまっすぐに立ち、歩き出しました。

幾日もこんなことをするので、困り果てたパウロは、振り返ってその霊に、

「イエス・キリストの御名によって命じる。

◀ シナイ山にある修道院「カタリーネン クロースタ」

この女から出て行け。」と言った。すると即座に、霊は出て行った。　（使徒　16・18）

このことがエペソに住むユダヤ人とギリシヤ人の全部に知れ渡ったので、みな恐れを感じて、主イエスの御名をあがめるようになった。　（使徒19・17）

弟子たちが行くところはどこでも、主の御名が大いにあがめられました。

私たち信ずる者に与えられているもっとも大きな特権は、「イエス・キリストの御名によって祈ること」です。それによって、主の救いと解放する力が明らかになるからです。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。あなたがたが父に求めることは何でも、父は、わたしの名によってそれをあなたがたにお与えになります。」（ヨハネ 16・23）

そして第三の戒めは、私たちにとって非常に重大で神聖なものです。なぜなら、私たちはそのことによって、神の御名の偉大さを知ることができるからです。ですから、聖なる神の御名をみだりに唱えることは、恐ろしいことです。

「あなたは、あなたの神、主の御名を、みだりに唱えてはならない。主は、御名をみだりに唱える者を、罰せずにはおかない。」（出エジプト 20・7）

この神の戒めを破った結果は、個人や家族の問題、国民生活の問題、さらには国と国の争いなどの形で現われてきます。

思い違いをしてはいけません。神は侮られるような方ではありません。人は種を蒔けば、その刈り取りもすることになります。（ガラテヤ 6・7）

「主よ。主よ。」と言ってもそれがまことの神である主でなければ、まったく意味がなく、かえって罰せられることになります。キリスト者も自分の人生の支配権を明け渡さなければ、実を結ぶことはできません。主の御名もあがめられることはありません。そして、主の御名があがめられなければ、かえって神の神聖さを損なうことになってしまいます。

「神の名は、あなたがたのゆえに、異邦人の中でけがされている。」と書いてあるとおりです。　（ローマ 2・24）

このことは、多くの信者にもあてはまります。「主よ。主よ。」と言いながら、自分勝手なことをすれば主の御名が損なわれ、けがされます。そうすると、未信者は信者を通してイエス・キリストのもとに引き寄せられるのではなく、反対にイエス・キリストから引き離されてしまいます。

さらに主なる神に対する恐れを失い、主なる神に対してなれなれしい態度を取ることもまた、信者にとっての大きな危険です。

「わたしが目を留める者は、へりくだって心砕かれ、わたしのことばにおののく者だ。」（イザヤ 66・2）

主を恐れないことは、多くの場合、敗北の原因となります。ウザは主を恐れなかったために死ななければなりませんでした。

こうして彼らがキドンの打ち場まで来たとき、ウザは手を伸ばして、箱を押えた。牛がそれをひっくり返しそうになったからである。すると、主の怒りがウザに向かって燃え上がり、彼を打った。彼が手を箱に伸べたからである。彼はその場で神の前に死んだ。（I歴代誌 13・9、10）

私たちが主の御名をあがめるように、主が「主の恐れ」を私たちに教えてくださるように、主に祈りましょう。

主よ。あなたの道を私に教えてください。私はあなたの真理のうちを歩みます。私の心を一つにしてください。御名を恐れるように。　（詩篇 86・11）

その日、あなたがたは言う。「主に感謝せよ。その御名を呼び求めよ。そのみわざを、国々の民の中に知らせよ。御名があがめられていることを語り告げよ。主をほめ歌え。主はすばらしいことをされた。これを、全世界に知らせよ。」　（イザヤ 12・4、5）

主よ。あなたは私の神。私はあなたをあがめ、あなたの御名をほめたたえます。あなたは遠い昔からの不思議なご計画を、まことに、忠実に成し遂げられました。（イザヤ 25・1）

「わたしは主、これがわたしの名。わたしの栄光を他の者に、わたしの栄誉を刻んだ像どもに与えはしない。」・・・わたしは盲人に、彼らの知らない道を歩ませ、彼らの知らない通り道を行かせる。彼らの前でやみを光に、でこぼこの地を平らにする。これらのことをわたしがして、彼らを見捨てない。彫像に拠り頼み、鋳像に、「あなたがたこそ、私たちの神々。」と言う者は、退けられて、恥を見る　（イザヤ 42・8、16、17）

あなたがたのうち、だれが主を恐れ、そのしもべの声に聞き従うのか。暗やみの中を歩き、光を持たない者は、主の御名に信頼し、自分の神に拠り頼め。（イザヤ 50・10）

「地を造られた主、それを形造って確立させた主、その名は主である方がこう仰せられる。わたしを呼べ。そうすれば、わたしは、あなたに答え、あなたの知らない、理解を越えた大いなる事を、あなたに告げよう。」（エレミヤ 33・2、3）

「主よ。私は深い穴から御名を呼びました。あなたは私の声を聞かれました。救いを求める私の叫びに耳を閉じないでください。私があなたに呼ばわるとき、あなたは近づいて、『恐れるな。』と仰せられました。」（哀歌 3・55～57）

「わたしは、わたしの聖なる名をわたしの民イスラエルの中に知らせ、二度とわたしの聖なる名を汚させない。諸国の民は、わたしが主であり、イスラエルの聖なる者であることを知ろう。今、それは来、それは成就する。―神である主の御告げ。―それは、わたしが語った日である。」（エゼキエル 39・7、8）

あなたがたは飽きるほど食べて満足し、あなたがたに不思議なことをしてくださったあなたがたの神、主の名をほめたたえよう。わたしの民は永遠に恥を見ることはない。・・・しかし、主の名を呼ぶ者はみな救われる。主が仰せられたように、シオンの山、エルサレムに、のがれる者があるからだ。その生き残った者のうちに、主が呼ばれる者がいる。（ヨエル 2・26、32）

「もし、あなたがたが聞き入れず、もし、わたしの名に栄光を帰することを心に留めないなら、―万軍の主は仰せられる。―わたしは、あなたがたの中にのろいを送り、あなたがたへの祝福をのろいに変える。もう、

それをのろいに変えている。あなたがたが、これを心に留めないからだ。」(マラキ 2・2)

「しかし、わたしの名を恐れるあなたがたには、義の太陽が上り、その翼には、癒しがある。」 (マラキ 4・2)

次に、第四の戒めについて見てみましょう。

安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ。六日間、働いて、あなたのすべての仕事をしなければならない。しかし七日目は、あなたの神、主の安息である。あなたはどんな仕事もしてはならない。—あなたも、あなたの息子、娘、それにあなたの男奴隷や女奴隷、家畜、また、あなたの町囲みの中にいる在留異国人も。—それは主が六日のうちに、天と地と海、またそれらの中にいるすべてのものを造り、七日目に休まれたからである。それゆえ、主は安息日を祝福し、これを聖なるものと宣言された。(出エジプト 20・8～11)

第四の戒めは、ただ単に安息日や主の一日についてだけではなく、一週間の中をどのように過ごすべきかについて語っています。「六日間、働いて、あなたのすべての仕事をしなければならない。しかし七日目は、あなたの神、主の安息である。あなたはどんな仕事もしてはならない」と命令されています。

この戒めにおいては主なる神に対する人間の基本関係が定められています。「わたしは、あなたの神、主である。」、「あなたは…しなければならない。」と。

主なる神は創造主として、また人間に対する支配者としてお語りになり、人間の生活を定められます。主は人間の労働時間と休息時間とを次のように規定されたのです。

「六日間、働いて、あなたのすべての仕事をしなければならない。」これは神の命令です。この神の戒めを通して、私たちの生活は聖められるのです。人間は主なる神への従順な関係に立つとき、毎日の仕事を喜んで行なうようになります。毎日の仕事は神の戒めによってきよめられ、主なる神に対するご奉仕になります。

最も小さな、あるいは最も単純な、あるいは最も困難な仕事がこのようにして神との直接の関係にもたらされるとは、何とすばらしいことでしょうか。労働はただ単に神の戒めだけではなく、神の賜物となります。自分の仕事を人間に対する奉仕としてではなく、主なる神に対する奉仕とみなすとき、多くの人間はどれほど満足し、幸せでありましょう。

毎日の仕事が神の戒めによって清められるならば、多くの社会的、政治的問題は解決されるでしょう。

今日、人々は「永遠の救い」を忘れてしまうほど忙しく働いています。また多くの人は働かなくてもいい人をうらやましく思います。このようにして人間の人生は空しいものとなります。しかし労働が主なる神に対する聖なる奉仕であるとき、事情はまったく違ったものになります。

主なる神は一週間の一日を安息日と定め、それを守るように命令なさいました。神ご自身が六日間は天と地を創造され、七日目にお休みになったから、人間もそのようにすべきであると定められたのです。

なぜ主なる神はお休みになったのでしょうか。それは神が休息を必要としたからではなく、天と地を完成なされた後には、もはや何もする必要がなかったからです。神の休息はすべてが完成されたことの表現です。

こうして、天と地とそのすべての万象が完成された。それで神は、第七日目に、なさっていたわざの完成を告げられた。すなわち、第七日目に、なさっていたすべてのわざを休まれた。神はその第七日目を祝福し、この日を聖であるとされた。

(創世記 2・1～3)

したがって七日目の日は、創造が完成された大いなる日、創造主の安息日、主なる神の誉れと栄光の日です。主はすべての被造物が主の休息の日を守り、それによって創造主を敬うことを望んでおられます。最初の人間は、六日目に創造されました。したがって、最初の人間がこの地上で経験した最初の日は、神の安息日でした。人間の生活が休息の日から始まるとはなんとすばらしいことでしょうか。

神の七番目の日は、人間の最初の日でした。神はまず最初にお働きになり、すべてのわざが完成された後でお休みになりました。人間はまずはじめに休息し、それからエデンの園で神によって定められた課題を行ないました。

また、主なる神は、それよりもさらに偉大なみわざを成就なさいました。すなわち十字架につかれたお方主イエス・キリストを通して、全人類を悪魔と死の力から、そしてまた罪の力から贖ってくださったという事実です。

そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。

(Iペテロ 2・24)

この地上でなされたもっとも困難な仕事がそれでした。

「あなたがわたしに行なわせるためにお与えになったわざを、わたしは成し遂げて、地上であなたの栄光を現わしました。」

(ヨハネ 17・4)

「完了した。」と主イエス様は叫ばれました。私たち全人類の贖いのために成されるべきことはもはや何一つありません。私たちは贖われたのです。主イエス様はみわざを成し遂げられた後、御座にお着きになりました。

御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現われであり、その力あるみことばによって万物を保っておられます。また、罪のきよめを成し遂げて、すぐれて高い所の大能者の右の座に着かれました。

(ヘブル 1・3)

主の救いのみわざは完成されました。主イエス様はそれに何一つ付け加えるものをお残しになりませんでした。ですから主イエス様は、みわざが完成された証拠として休息なさるのです。

主イエス様はまず初めにお働きになり、それから休息にはいられました。主がよみがえられた日に、すなわち週の初めの日は、主の勝利の日です。主なる神は、御子イエス様を死者の中からよみがえらせたとき、贖いのみわざを証明なさいました。主イエス様が勝利されたので、私たちは休息に入る道が与えられました。

自分自身の義を追及することに疲れ果ててしまった人、また自分の罪の状態から逃れようと一生懸命に努力した結果、敗北してしまった人は、主イエスの招きに従います。

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」

(マタイ11・28)

この招きに従った人について、ヘブル人への手紙には次のように述べています。

信じた私たちは安息にはいるのです。

(ヘブル 4・3)

新しく生まれた人間は、主イエス様の安息にはいります。その新しい生活の最初の日は、「ご自分のわざを終えて休まれた」ことによって、特徴つけられています。

神の安息にはいった者ならば、神がご自分のわざを終えて休まれたように、自分のわざを終えて休んだはずです。

(ヘブル 4・10)

主の安息から、新しく生まれた人間は、新しい仕事に向かいます。それは罪の贖いを求める自己の戦いとはまったく違ったもので、主なる神に対する感謝と奉仕の仕事です。

主イエス様はまず初めにお働きになり、それからお休みになりました。主のみもとに来て新しく生まれ変わった人は、まず初めに休息し、それから働きます。

一週間のうちの安息の日は、主なる神が私たちの造り主であること、そしてイエス・キリストによる私たちの贖い主であることを、繰り返し私たちに思い起こさせる日です。私たちに安息日が与えられたのは、私たちが主の御名を誉めたたえるためです。

「あなたはイスラエル人に告げて言え。あなたがたは、必ずわたしの安息を守らなければならない。これは、代々にわたり、わたしとあなたがたとの間のしるし、わたしがあなたがたを聖別する主であることを、あなたがたが知るためのものなのである。これは、あなたがたにとって聖なるものであるから、あなたがたはこの安息を守らなければならない。これを汚す者は必ず殺されなければならない。この安息中に仕事をする者は、だれでも、その民から断ち切られる。」

(出エジプト 31・13～14)

安息の日は、主が「私たちを聖別する主」であることの「しるし」として、私たちに与えられています。したがって私たちは安息日を通して、主おひとりだけが創造し、贖い、聖別することがおできになるということをはっきりと認めることができます。

安息日とは休息ということであり、土曜日などではありません。旧約聖書においては、イスラエルの民は来るべき贖い主を待ち望み、「約束された安息」を期待したのです。ですから彼らは七日目を安息日として祝いました。

しかし私たちは十字架にみわざが成された後の時代に生きています。約束された贖い主、イエス・キリストはすでにおいでになったのであり、救いのみわざを完成なさったのです。私たちはイエス・キリストによって成就された救いを振り返ってみています。ですから私たちは週の最初の日を、「完成された安息日」すなわち休息の日として祝います。

週の七日目を「約束された安息日」として祝う者は、七日目をそのような意味で祝う今日のイスラエルの民と同じことになります。イスラエルの民族は未だに贖い主の到来を待ち望んでいるからです。私たちはそうではなく、贖い主がすでにおいでになったことを喜び、贖いのみわざが完成されたことを誉めたたえます。私たちは週の初めの日、すなわち日曜日を「主にある安息のしるし」として祝うのです。

祭司職が変われば、律法も必ず変わらなければなりませんが、・・・(ヘブル 7・12)

聖書にあるとおり、確かに祭司職は変わりました。もはや人間ではなく、御子イエス・キリストが大祭司になられました。それゆえに安息日もまた新しく大祭司となられた御子イエス・キリストを中心に定められなければなりません。すなわち私たちは週の七日目ではなく、主がよみがえられた日、すなわち週の最初の日を安息日として祝うのです。

しかし私たちは本当にその日を祝っているのでしょうか。ある人はもはや神の戒めから解放されているのだから安息日を守る必要がないと考えています。しかしそれは結局、私たちを聖別された主が私たちに与えてくださった「幸いなしるし」を捨てることになります。

旧約聖書の信者たちは来るべき贖い主を待ち望んで、安息日を守っていたのです。ましてや私たちはすでに成就された贖いのみわざを覚えるため、贖い主イエス・キリストを誉めたたえざるをえません。

主なる神は安息日を非常に大切にしてくださいます。そして私たちが主なる神を礼拝するための時を持つことができるようにと配慮してくださいます。家族も主のものであり、仕事もまた主からいただいたものです。主が私たちのためにすべてのことをしてくださったことについて気がつくはずです。

今日、日曜日は私たちにとってどのような意味を持っているでしょうか。大部分の人にとって日曜日はまったく聖なる性質を失ってしまっているのではないでしょうか。多くの場合、日曜日はレクリエーションや遠足、また家でごろごろしている日になってしまっているようですが、それはけっして「主の日」にふさわしいことではありません。また多くの人々は、日曜日がその他の六日間の労働日と同じように、主なる神が定められたことを忘れてしまっています。その人たちは、自分勝手なことをするために日曜日があると思っています。神の目から見ると享楽と快楽のために使われる日曜日は、汚れた罪深いものです。

特別に主にささげられたものであるべきはずの日曜日は、楽しみやスポーツ、さらには罪や汚れの日になってしまっています。楽しみの日は、その前の日の晩、すなわち土曜日の夜から始まります。それもまた道徳的に堕落した人間を現わす証拠です。

今日、この世の支配者は悪魔です。日曜日は人間が悪魔に仕える日になってしまっていることは明らかです。

あなたを聖別する日としての安息日を覚えましょう。

人間は労働時間の中断として日曜日を用いるように創られています。この第四の戒めを守らないことは個人生活、家族生活、国民生活にとって恐るべき深刻な結果をもたらします。精神的に患う人々の数は今日、今までになかったほどの数に上っています。そしてまた倫理的道徳的な乱れに関しても、多くの場合、日曜日を正しく守らなかったことにその原因を見出すことができます。あなたは安息日を聖なる日とすべきです。あなたの神である主に日曜日の時間と空間をささげましょう。主を覚えましょう。あなたの神である主を喜び、賛美し、

主に仕えることこそ、日曜日をほんとうに聖別することです。

主のみことばを読み、主のみことばに耳を傾け、主のみことばを告げ知らせるために、日曜日は私たちに与えられています。主イエス様を愛し、信じる者が誰でもみな、日曜日ごとに主のみことばに耳を傾け、述べ伝えるならば、この地上はもっと変わったものになっていたでしょう。

一生涯における日曜日というものは、その人にとって大変大きな財産であり、そしてまた同時に大きな責任を伴ったものであると言えましょう。たとえば70歳になった人は、それまでの人生において10年間に等しい日曜日を持ったことになるわけです。

あなたはおいくつですか。あなたはすでに何年間分の日曜日を持ったことになるのでしょうか。そしてあなたはそれをどのように用いたのでしょうか。誰一人として主の御座の前で言い訳をすることはできません。

「私たちにはそのための時間がありませんでした。」と言うのが、神のみことばを避けたい現代人の言い訳ですが、それは主のみ前に何の言い訳にもなりません。

あなたは日曜日を経験したのですから、自分のたましいの救いのための時間を持っていたはずです。今まで過ごした日曜日は、無駄な時間になっていたかもしれません。そうだとすれば、今日、あなたの主なるイエス様のみもとに行き、そのことを主に言い表わしてください。

あなたの全生涯を主のみ手に明け渡し、主の日を正しく整えていただいてください。そうすれば日曜日はほんとうにあなたにとって、一週間のうちでもっともすばらしい日、神のみ前に喜びの日となります。

「安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ。」(出エジプト20・8)という第四の戒めは、礼拝の特別の時を定めます。

礼拝とは何でしょうか。すべてのことを主のみこころのままにお委ねすること、主のみもとにひれ伏すこと、そして自分のもっとも愛するものを主にささげることです。

サムエルという預言者の母親のハンナを例にとって見てみましょう。

ハンナは主なる神の前にぬかづき、**「万軍の主よ。もし、あなたが、はしためのなやみを顧みて、私を心に留め、このはしためを忘れず、このはしために男の子を授けてくださいますなら、私はその子の一生を主におささげします。」(Iサムエル1・11)**と祈りました。主はその祈りを聞き届けてくださり、ひとりの子をお与えになったのです。しかしハンナは与えられたその子を主にお返ししました。ハンナの願いの頂点は子どもでした。しかしハンナはその子が主より与えられるや、その子を主にお返ししました。

「この子のために、私は祈ったのです。主は私がお願いしたとおり、私の願いをかなえてくださいました。それで私もまた、この子を主にお渡しいたします。この子は一生涯、主に渡されたものです。」こうして彼らはそこで主を礼拝した。 (Iサムエル1・27、28)

このように言える人は、主をまことに礼拝する礼拝者です。主なる神に自分のもっとも愛するものをささげることを知らない人は、まことの礼拝を知らない人ではないでしょうか。私たちはハンナのように私たちのサムエルを、もっとも愛するものを主にささげることができるでしょうか。もしささげることができるならば、礼拝とは何か、というその意味を知るようになります。礼拝とはおのれのもっとも愛するものを主にささげることです。

最後にあの偉大なる信仰の父、アブラハムに目を留めてみましょう。

アブラハムは主の道を歩いたから、まことの礼拝者となりました。神の道を歩むために、彼は非常に苦しい別れをしなければなりませんでした。肉的にはハガルとイシュマエルと別れなければならず、霊的にはロトとソドムから分離しなければならず、また、愛するひとり子イサクとも別れなければなりませんでした。

神は仰せられた。「あなたの子、あなたの愛しているひとり子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。そしてわたしがあなたに示す一つの山の上で、全焼のいけにえとしてイサクをわたしにささげなさい。」(創世記 22・2)

アブラハムはこの神のみことばに対して、「主よ、なぜですか。なぜイサクを殺さねばならないのですか。もしイサクが死んだならあなたの約束は反故になり、何の価値もなくなるではありませんか。」と言ってつぶやくことを決してしませんでした。

アブラハムは次のことを確信していました。主なる神の道に自分のすべてをささげることによってのみ、神を礼拝することができるのだと。ですから信仰の父であるアブラハムはその若い者たちに、**「あなたがたは、ろばといっしょに、ここに残っていなさい。私と子どもとはあそこに行き、礼拝をして、あなたがたのところに戻って来る。」(創世記22・5)**と言ったのです。アブラハムは若い者たちに「私はモリヤの山でわが子イサクを殺す。」とは言いませんでした。なぜかというと、もっとも愛するものをささげることは、とりもなおさず、礼拝を意味しているからです。すべてを主にささげることが、まことの礼拝です。犠牲のあるところには必ず祭壇が築かれます。祭壇の築かれているところには必ず礼拝があります。このことを静かに思い巡らすなら、私たちにとって主イエス様の十字架が日々どれだけ大切なものであるかが深く、深く知らされてくると信じます。礼拝は自分のもっとも愛するものを主にささげることです。

「しかし、真の礼拝者たちが霊とまことによって父を礼拝する時が来ます。今がその時です。父はこのような人々を礼拝者として求めておられるからです。神は霊ですから、神を礼拝する者は、霊とまことによって礼拝しなければなりません。」(ヨハネ 4・23、24)

肉は神の道におのれを委ねることをしません。肉は神のみもとにひれ伏し、拝することをしません。肉はおのれのもっとも愛するものを主にささげることをしません。ドイツには「肉ではなく、肉ではなく、霊だけが私たちの支配者であるように」という歌があります。

そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。 (Iペテロ 2・24)

「あなたがわたしに行なわせるためにお与えになったわざを、わたしは成し遂げて、地上であなたの栄光を現わしました。」(ヨハネ 17・4)





10th Camping in Germany Anniversary





「誕生日にドイツで受洗」の夢が

Bグループに参加した岩崎敦子さんは、「洗礼を受けるなら誕生日にドイツで」という年来の夢が叶えられました。「ことしは主人の予定が詰まっていて、参加は無理と諦めていました。ところが直前になって、すべての予定が取り消され、1日遅れでBグループに滑り込むことができたんです。しかも期間中に6月30日の誕生日が来て…、まさかの夢が実現しました」と敦子さん。

Aグループでは片桐喜央さん、佐々木健司さんの二人が受洗しました。





フランクフルト空港で出会いの導き

6月26日午後のフランクフルト空港。よろこびの集い2日目のこの日、それぞれ事情で団体出発できなかった7人が、経由地の同空港で感激の出会いをしました。仕事で1日遅れの参加となった岩崎静男さん、敦子さん夫妻。パスポートを忘れて静岡の自宅から届けてもらった吉野千鶴子さん。吉野さんに付き合って出発を遅らせた芝田康子さん。同じくパスポートを忘れ、あきらめて富山の家に帰ったら、「1日遅れで行けますよ」と旅行社から電話があり、かけつけた児玉幸子さん。やはり遅れ参加の生田玲子さん、障乃さん親子。ほとんどの人が互いに初対面でしたが、「どちらへお出かけですか」の語りかけから、ほどなく同じ行き先であることがわかったそうです。「もし、岩崎さんらと出会わなかったら、言葉も通じませんし、ミヘルスベルグへ行けなかったかもしれません。主の導きを感じました」と芝田さん。シュトゥットガルト空港からは相乗りタクシーを利用、1時間近い道のりを1人あたり10ユーロ（約1400円）の少ない負担で無事、集会所に到着。ちょうど夕食に間に合う時刻でした。

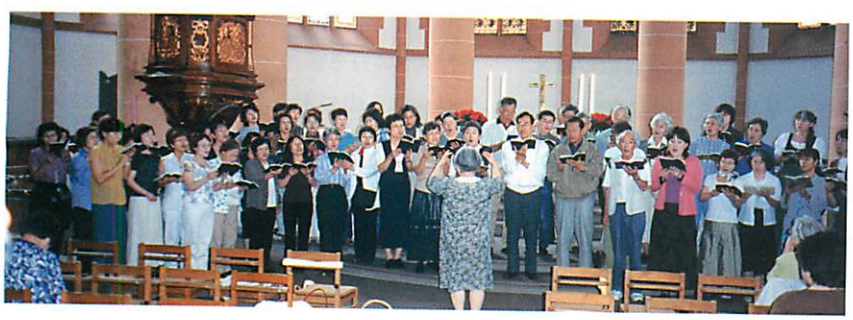




古都ハイデルベルクの聖霊教会で賛美の合唱

ドイツよろこびの集いの楽しみの一つは遠足です。今年は有名なノイシュバンシュタイン城、オーストリア・ザルツブルグに近い氷河湖ケーニッヒゼー、古都ハイデルベルクなどを訪れました。そしてハイデルベルクでは、由緒ある聖霊教会で賛美をする恵みにあずかりました。この教会はドイツ最古の大学、ハイデルベルク大学の母体となりましたし、宗教改革のマルチン・ルターが説教したこともあります。6歳のモーツアルトやメンデルスゾーンが演奏会を開いた場所でもあります。響きのいい天井の高い会堂では、牧師さんがバッハの曲をパイプオルガンで奏でてくださり、Bグループの有志合唱団も「日々の歌」から2曲を歌いました。

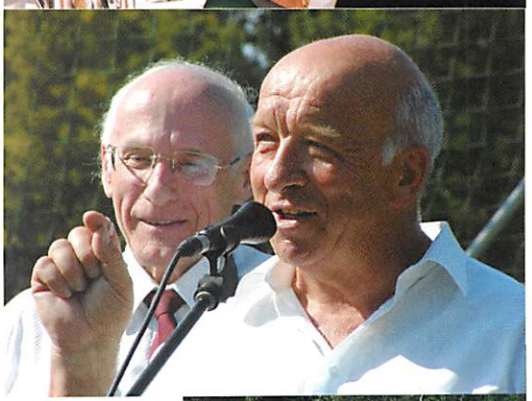












大歓迎の野外夕食パーティー

22日夕、Aグループ一行はアイドリンゲンの集いに参加した帰途、ディーター・シェーファーさんらの歓迎を受けました。シェーファーさんは、今年4月、多数の信仰の仲間を連れて来日し、御代田のよろこびの集いに参加した方です。また、雑誌「主は生きておられる」に多数の写真を提供してくださっています。(子どもの頃はやんちゃで、日曜学校でベックさんに叱られてお尻を叩かれたこともあったそうです。)

そして、この日は、4月に世話になったお返しにと、ゲルトリンゲンのYMCA施設を借りきって、日本人グループをブラスバンド演奏で出迎え、野外の夕食パーティーを催してくださいました。













猛暑と厳寒に見舞われました

前半のキャンプは「この時期では初めて」と地元の方が驚くほどの暑さに見舞われました。とくにAグループの期間は猛暑続きで、そんな陽気に誘われたのか毎晩、日没と共にホタルが近くの林に群舞して、目を楽しませてくれました。ところが後半は、うって変わって60年ぶりと言われる寒さ。集会2日目は季節外れの雪で、遠足が中止になりました。

①.ローテンブルク
②.ノイシュバンシュタイン城
③.ボーデン湖(ボーデンゼー)
④.ティティ湖(ティティゼー)
⑤.ハイデルベルク



からだは一つ、御霊は一つ

今回の集いには、全員が5月に出版された「日々の歌」を持参しました。この本は全224曲の約半分をドイツの歌集(「グラウベンスリーダー」と「ノイエリーダー」)から採用しています。このため礼拝や福音集会での賛美は、同じ曲を日本とドイツの参加者がそれぞれの国語で共に歌う、という"混声(語)"合唱になりました。

一番多く歌われたのは212番「世界のうちに選び出され」です。「一つの心、一つの御名、一つのからだ、一つの霊、一つの祈り、一つの歌」という歌詞を口にしながら、言葉の違いを超えて「主にあって一つ」であることを実感したときでもありました。

10年目を迎えたドイツよろこびの集い

2003年ドイツよろこびの集いは、前半が6月17日—24日(Aグループ)、6月25日—7月5日(Bグループ)の2回にわたり、後半は10月19日—29日に、それぞれ催されました。今年はキリスト集会の団体が初めてドイツを訪れてから10年目に当たります。日本からの参加者はそれぞれ122人(Aグループ)、92人(Bグループ)、91人(後半)で、このうち30人はABを通して滞在しました。このほかドイツ、ザルツブルグ(オーストリア)、パリ、モスクワ、米国などに在住の日本人と、ドイツの方々が参加してくださいました。

集いの場所は前半が南ドイツ、シュトゥットガルト市から南へ車で1時間ほどのところにあるミヘルスベルク、後半はミヘルスベルクの南西120キロほどのフィリンゲン、どちらも緑豊かな高原です。そこにたたずむ簡素で清潔な宿泊施設は談話室や集会所が備わり、この世の喧騒とはおよそ縁のない静けさです。そのような環境で参加者は、心静かに聖書のメッセージに耳を傾け、主イエス様を賛美し、語り合いの時を過ごしました。その合間には、そろって遠足や買い物に出かけたりもしました。そんな集いの日々から、いくつかの話題をお届けしましょう。

主から脳梗塞をいただいて

古田　稔

1939年東京生まれ。日本大学理工学部卒。ミツミ電機(株)を経て国内の米国系半導体メーカーで要職を歴任、1990年サーヴァンツ インタナショナル(株)設立、96年米国Q Logic Corporation社の日本総代理店となる。2002年「羊の家」グループを結成。家庭は要康子さん。長男雅一さん、次男知士さんはそれぞれ結婚して独立。

2001年がまもなく終わろうとするクリスマスの当日、私は突然、脳梗塞になりました。62歳になって一月が経ったときでした。その年の12月初めに米国へ出張し、帰ってすぐ会社のクリスマス会をディズニーランドで行い、疲れがとれるまもなく迎えたクリスマスでしたが、その日にイエス様は脳梗塞という病をくださったのです。

この病気は、私に必要であるがゆえにイエス様がお与えになったのだ、と思いました。「**天の下では、何事にも定まった時期があり、すべての営みには時がある。生まれるのに時があり、死ぬのに時がある。**」(**伝道者の書　3・1、2**)と聖書にありますが、この病気も主が定められたのだから、まだ天国においで、ということにはならないと思え、死に対する恐れはまったくなく、入院した日赤武蔵野病院で、麻痺した左半身のためのリハビリを始めました。左半身が不自由になっても右半分があり、言葉も話せたので、「天国に行けばこの麻痺はすべて取り除かれ、元のように自由に動けるようになる。それまでこの地上に置かれている間だけの不自由だ」と、あわてることなく療養に専念できました。

マタイの福音書によれば、イエス様は、しばしば中風で寝たきりの病人を癒されたとありますが、必要があれば主はそのように癒されるであろう、とすべてを主の御手に委ねました。22年前にイエス様と出会ったときのことを、キリスト集会の証し集「光よあれ」第2集に書かせていただきましたが、イエス様はその後もすべてを委ねきれていない私に、主に委ねざるを得ない状況に追いやられたのです。

この病の背後に主がいてくださる、という確信があったので、何の思い煩いもなく療養生活を送ることができました。当時40人以上になっていた会社(サーヴァンツ インタナショナル株式会社)は、私が3年ほど前に身体の変調を起こしたときにIBM社に勤務していた長男雅一が「親父、手を貸そうか」と言って移って来てくれましたので、任せることができました。そして、長野県の鹿教湯温泉でリハビリに励むことになりました。

入院されている患者の中には、病に絶望して「死にたい、死にたい」と夜も眠れずに苦しんでいる方もおられ、イエス様の救いの必要を痛感し、イエス様のことをお話しました。イエス様がこのことを起こし、高ぶりやすい私を砕かれたのだ、それは最善のことなのだという信仰に支えられて、三月ほどの鹿教湯での療養を終えました。

実はその前から、キリスト集会の方々とごいっしょに、力をあわせて仕事をする道はないものかと考え、祈っておりましたが、鹿教湯での入院の間、集会の皆さんが病院に訪れてくださり、面会室が事業計画の相談の場所となることがよくありました。皆で祈って話しているうちに、それぞれが主からいただいている事業を持ち寄り、新しいブランドでいっしょにやっていこうじゃないか、ということになったのです。

リハビリ中は、よくインターネットで情報収集をしていましたが、夜中までパソコンを覗いていると、よく看護婦さんに「身体とお仕事とどっちが大切ですか」と叱られました。この鹿教湯にいる間に新しい事業の方向が少しずつ固まり、「高齢者を対象とした、生活のお手伝い」を基本的なコンセプトとするという方向が決まりました。私自身、半身が不自由なので「新しい生活のシステム」を必要としたせいでもありますが、この世があまりにも障害者にとって物理的、精神的なバリアが多過ぎる、という現実に気づかされたからでもあります。

御代田でバンクーバーの野田房男さんに、快適な生活環境を配慮した別荘を建てていただいたことも、よい経験となって、これぞ高齢者の家であると確信しましたので、野田さんにもパートナーとして参加をお願いし、快適ハウスを「羊の家」というブランドで輸入販売することになりました。家という大きな商品ですので、日本サイドの受け皿として、一級建築士の岩下さんにも参加をお願いしました。その家の中を整える物はできるだけ自然のもの、本物であるということを前提に、絵画、ペルシャ絨毯、家具、生活の小物などを揃え、快適な生活環境を築ける品揃えを図りました。これらのものの販売を通して、私たちはイエス様を中心とした、高齢者の方々のグループホームなどの建設、運営を夢に描いていたのです。

これらの事業計画の大枠が決まり、鹿教湯を退院してまもない5月、思いがけなくも大腸から下血をし、佐久総合病院に救急車で運ばれ、1.5リットルの輸血で3週間の入院をすることになったのです。固形物をほとんど口にできず、さらにやせ細って、74キロあった体重が57キロまで減少しました。半年で17キロの減量は、やはりこたえました。



古田ご夫妻



長男一家、次男夫婦と一緒に

やがて退院し、佐久から戻って、主が調布市に与えてくださった新しい住まいに落ち着くことができました。振り返ってみると、主がいてくださったことに、何と幸いであったかという思いでいっぱいになり、祈ってくださった集会の皆様や友人、知人に次のような手紙を送りました。

主の御名をほめたたえます。今年は、ことのほか足早に春が駆け抜けて行ってしまいましたが、その春を信州の山深い鹿教湯という温泉場にありますリハビリテーション病院にて、退院いたしました4月20日までの約2ヶ月間、創造主なる神様の恵みとして、冬から春への移り変わりをつぶさに見ることができましたのも主からの贈り物でした。木陰に残った雪の中より芽を出している一輪の野花にいのちの息吹を覚えることができ、まさしく「人はみな草のようで、その栄えは、みな草の花のようだ。草はしおれ、花は散る。しかし、主のことばは、とこしえに変わることがない。」(1ペテロ　1・24、25)とのみことばを思い起こされました。昨年12月25日、脳梗塞という思いもしなかった病をイエス様からのクリスマスプレゼントとしていただきましたが、主は私の心身を生き返らせ、再びこの世にお戻しになりました。発病以来4ヶ月の間、皆様のお祈りとお見舞いとみことばに支えられましたことを心から感謝いたします。死の影の谷間を垣間見てきた私にとって、信じる者に与えられる永遠のいのちの約束は何物にも代え難く、イエス様の十字架によって示された御愛の偉大さをこの身で味わい知る喜びに恵まれましたことも感謝でした。イエス様は、私のような罪多いチリにも等しい者にも多くの恵みをくださいました。身体半分で生きよ、と主は言われましたが、それと同時に必要な助け手として、妻と二人の息子たち家族も身近に置いてくださいました。そして私たち夫婦も25年住み慣れた八王子から息子たちの住まう調布市へと移されました。25年前イエス様を知らずにこの調布に住んでいた時には家庭が崩壊の瀬戸際でした。家庭の再建のために八王子に移転し、そこで主と出会い、家族すべてが主のしもべとしての人生を歩み始めた私たちは、初めて所帯を持ち二人の息子を授かった土地、調布に再び戻ってきました。ここで主は10年前に「サーヴァンツ インタナショナル」という会社を立て上げてくださり、いま40名ほどの方々と共に働く場としてくださっています。主のご計画がどのようなものかは分かりませんが、頼ってお任せしておけば最善をなしてくださると確信しています。いよいよ本格的に社会復帰をと準備を進めておりました5月2日、外出先の御代田で多量の下血に見舞われ、救急車で佐久総合病院に緊急入院いたしましたが、主は再び私のいのちを永らえさせてくださいました。20日間ほどの入院でしたが、イエス様と共に一度十字架につけられ死んだ身にとって肉の身の死は何ら恐れるに値しないことを学ばせていただき、また、主の決められた時が来ない限り主の許へは行くことができない、ということも主は教えてくださいました。主が用いてくださる限り、以前と同様に海外や地方の集会のご用も勤めさせていただければ、と願っております。皆様に祈っていただき心から感謝申上げます。

主は私の羊飼い。私は、乏しいことがありません。主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます。主は私のたましいを生き返らせ、御名のために、私を義の道に導かれます。たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れません。あなたが私とともにおられますから。あなたのむちとあなたの杖、それが私の慰めです。私の敵の前で、あなたは私のために食事をととのえ、私の頭に油をそそいでくださいます。私の杯は、あふれています。まことに、私のいのちの日の限り、いつくしみと恵みとが、私を追って来るでしょう。私は、いつまでも、主の家に住まいましょう。(詩篇　23篇)

この手紙をお出しして早や1年以上経ちました。その間、イエス様からいただいた恵みは数えきれません。その一つ、この8月に家族そろってハワイでの休養の機会をいただきました。発病以来、私を支えて、失った左半身の代わりをしてくれた家内、二人の息子たち、それぞれのお嫁さん、二人の孫と合計8人での、楽しい休暇であり、休養の時でした。35年前初めてアメリカに出張するときに寄ったハワイは、当時と様子がまったく変わっていましたが、海の色、空の青さは変わらず、息子に支えられて入ったハナウマベイの海水の辛さも昔のままでした。主の恵みで、その後体調も少しずつ良い方に向かっています。事業も順調に発展しています。主がくださった多くのあわれみと恵みに、心から感謝いたします。

家族の救いは主のお約束

水渡　紀久雄（みと　きくお）

1940年生まれ。東京都大崎中、日比谷高、東大経済学部卒。現在、NTTコミュニケーションズ（株）勤務。妻、君子さん。一男二女。

私は、集会に導かれて足かけ4年になります。それまでは普通のサラリーマンとして、生活の安定、家族の幸せ、仕事のやり甲斐などを日々の生活の目標に、さらに欲を言えば自分なりの社会貢献やライフワークを残したいと、そんな思いで生きてきた者です。

その私がイエス様に出会えたのは、還暦近くなってのこと。いま考えると、まるで奇蹟が起こったように思えます。

きっかけは、集会の証し集「光よあれ」を読んだことです。20年来の友人からいただいたものですが、「がんばらなくてもいい」という言葉が何度も登場する、不思議な本でした。あちこちで悲惨な話が聞かれ、私自身も仕事、健康、住宅ローンの返済など心配事が増えていたころのことで、「がんばらなくてもいい」という言葉に何かほっとするものを感じたのです。

誘われるままに何度か集会に出てみました。でもそのときの私は、まだ自分の価値観や生き方にこだわっていましたから、理屈であれこれ考えているうちに、それ以上進むのが怖くなり、間もなく集うのをやめてしまいました。

ところが一ヶ月ほどしたころに、私はふとした弾みで転び、むち打ち症になったのです。強い鎮痛剤を使ったので、眠く、だるく、落ち着かない気分でした。

何とか平安が欲しい。今度はすがるような気持ちで聖書を読み、集会にも集うようになりました。いま考えると、せっかく近くまで行きながら怖じ気づいた私をイエス様はあわれまれ、理屈を超えたところで、導きの手を差し伸べてくださったのだと思います。

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」

（マタイ　11・28）

こうした私の変化に一番驚いたのは、家内でした。それまで表面は元気で飛び回っていた私が、急に聖書を読みはじめ、四六時中、テープを聴いている。どんな宗教団体に誘われたのかと心配したようでした。「信仰はいいけど、どうして私がその気になるまで待てないの」などと言い、挙げ句は「頭を冷やしてくる」と旅に出てしまったこともあります。

でも集会の皆様のお祈りに支えられて、ほどなく家内と二人、初めてベックさんとお会いする機会が与えられました。ベックさんは、一人ではなく、夫婦そろって歩むべきこと、そのために二人ともあるがままの姿でイエス様のもとに来て、ごめんなさいと言って、すべてをゆだねることを説かれ、ともに祈ってくださいました。そこに集っている方の信仰はいわゆる宗教ではないことも、その日初めて知りました。

十字架の贖いなどはまだよくわかりませんでしたが、この日私はそれまでに感じたことのない平安を与えられ、家内も誤解が解けたようでした。

もっとも体調の方は、すぐ改善されたというわけではありません。眠い、だるいという症状がその冬じゅう続き、家内と二人で気落ちしてもいましたが、そのころ、ふと思わされたことがありました。

自分の中に根深い心配性や人前を繕う偽善的な心があり、それが罪であることはわかっていましたが、さらにその奥底に潜むものに気づいていなかったのです。それは、弱いのは体だけでなく、自分の意志も感情も絶えず揺れ動いていて頼りにならず、偉そうなことを言っても、ぎりぎりになると真っ先に出てくるのは、我が身を守ろうとする浅ましい思いだけだ、ということでした。

早く仕事から解放され自由に生きたいなどと言っては、なにか家族に責任があるかのように振る舞っている自分にも気づかされました。救われたと思っていた私ですが、そのときはじめて自分の罪の深さを知ったのです。

その直後の日曜礼拝で、私は、初めてお祈りに立ち、「我が身を守ることだけにきゅうきゅうとしている愚かな罪人を赦してください。私の罪のためにイエス様を十字架に掛けてしまって、ごめんなさい。そしてすべてをゆだねて困難の中をも歩ませてください」と祈りました。涙が出て最後まで続きませんでしたが、集会の方々が大勢寄ってきてくださいました。その日は心の底から喜びがこみ上げてきました。

それ以降、気持ちが本当に楽になり、素直に感謝できる自分にびっくりさせられる毎日になりました。「がんばらなくてもいい」とはこういうことかと、このとき初めて実感できたように思います。

私は黙っていたときには、一日中、うめいて、私の骨々は疲れ果てました。…私は、自分の罪を、あなたに知らせ、私の咎を隠しませんでした。私は申しました。「私のそむきの罪を主に告白しよう。」すると、あなたは私の罪のとがめを赦されました。

（詩篇　32・3、5）



受洗を記念して
後列、右から3、4人目、紀久雄さんと君子さん

私は目に見えて元気になりました。しかしイエス様は真実な方です。それだけでよしとはされませんでした。私と反対に、今度は家内が辛そうな顔を見せるのです。「自分には救われた実感がない」ということでした。「礼拝にも出たくない」と言うので、私が一人で出かけ帰宅すると、電気を消して泣いています。

このころの家内は、「イエス様よりも、まず家族のつながりが大事ではないか。なぜ今まで通りではいけないのか」「信仰といっても、目の前の現実から逃避しているだけではないか」と言っていましたし、また「夫が先で、妻が後というケースも珍しい」と言われ、それが辛いと言っては泣いていました。

夫婦の間は難しいものだと思います。お互いのわがままが先に立ち、なかなか素直になれないのです。とくに私の場合、夫としての面子の上に、「ついて来れない方が悪い」「こうして悩めば、いずれわかるだろう」などと相手をさばく気持ちが加わって、家内の苦痛を十分理解しないまま、愛のない態度を取りがちでした。救われた故の思い上がりとでもいうのでしょうか。こんなこともあって、集会にはできるだけ二人で集うように心掛けましたが、それ以上はどうすることもできません。「あとはイエス様お願いします」と祈るだけでした。出口の見えない状態が1年以上続いたと思います。

でもこの間イエス様は、見えないところで確実に働いていてくださったのです。

あるころから、家内の表情が少しずつ変わっていくのを感じました。自分から進んで集会に集うようになりました。

そして「夫婦間のことだけでなく自分の心の底まで光をあてられて辛かったけど、それはイエス様から与えられた試練だったらしい」と言ってからは吹っ切れた様子で、もう辛そうな顔を見せなくなりました。

とくにメサイアの合唱に加わる恵みをいただき、一昨年、昨年と二度にわたってコンサートにも出演しました。歌っていると涙が出て仕方がないと言い、参加2年目の練習が始まるころからは、喜びを素直に表情に表すようになりました。

そうした流れの中で、私たちがそれまで避けて通っていた洗礼について、イエス様は、はっきりとした希望を私たちの中に起こしてくださいました。そして昨年11月の西軽井沢国際福音センターのキャンプで、未信者である子どもたちとその家族が見守るなか、多くの方々の祈りに支えられ、二人揃って受洗の恵みにあずかることができました。

私ももちろんですが、家内も、「今日は涙を流すこともなく、ただうれしかった」と心から喜んでいました。

おかげさまで夫婦の絆が新しくされたように感じています。自然に一つ心でいられるようで、安心できるのです。何事でも二人でともに祈り、「主は生きておられ、私たちの近くにいてくださる」と言い交わすことができるのは、またとない恵みです。

主イエス様は、二人の罪人をそろって救うため、時を選び、最善をなしてくださいました。それは、価値のない者がただあわれみと一方的なご愛によって導かれて来たということであり、集会の多くの方々を周りに備えてくださったのも主の愛の現れです。

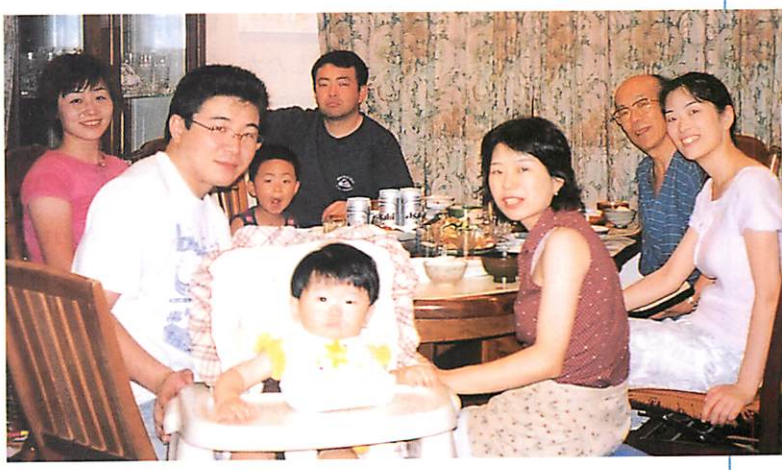
またこのことを通じて、自分の救いだけでなく家族みんなの救いこそ、主が望んでおられることだと念を押されたような気がします。

今は子どもたち残された家族の救いを二人で毎日祈っています。

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。　（ローマ　8·28）

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。　（使徒　16·31）

子供たち家族とともに





洗礼式を終えて

イエス様は私にこそ必要なお方

水渡（みと）　君子（きみこ）

1944年生まれ。長野県富草中、飯田風越高、日本女子大家政学部卒。現在、川崎市在住。夫、紀久雄さん。一男二女。

長い間私は家族に囲まれ、健康にも恵まれ、そのことを日々幸せと感じつつ、安心しきって、目に見えるもの、結果の出せるものを追い求めて生活しておりました。それはイエス様の入ってくださる余地のない生活でした。

こんな私たちの家庭に異変が起きたのが、1999年秋のこと。突然主人がイエス様のところに行ってしまったのです。私の心は「ひとり取り残された」という、どうしようもない寂しさでいっぱいになりました。

主人は「がんばらなくてもいい」とか、「罪の奴隷から解放されると自由になる」とか、いろいろ説明してくれるのですが、とても耳を傾ける気持ちにはなれません。「聖書の中の奇蹟や復活のことを本当に信じられるの」という私の問いに、「信じるんだよ」の一言。今思うと恥ずかしいことばかりですが、その時の私は、どこか違う、自分の思うようにならない主人を見て、変な新興宗教にとりつかれたのではないかと心配になりました。また、こんな心の奥の大切なことをなぜ一人で決めてしまったのか、「信仰は夫婦といえども個人の自由」との考えも浮かびましたが、今までは何をするにも相談しあって行動してきたのに、信仰なんて夫婦で歩まなければ同じ屋根の下で生活できなくなるのではないか…等々の不安と疑問が次々に湧いてきました。

そんな心境の中、11月1日、田園調布の家庭集会に導かれました。私にとってキリスト集会との初めての出会いです。変な新興宗教という心配は、このとき解消されました。ベックさんは、「君子、それはご主人がいけないよ。夫婦は一緒に歩むのがいいんだよ」と私の心を見通すかのようにやさしく声をかけてくださり、とてもうれしく思いました。

それからは、イエス様というより、主人がどのようなところで、なにを感じているのかを知りたくて、日曜日の礼拝、火曜日の学び会のほか、時々家庭集会に集うことになりました。イエス様を心から賛美し、喜んで集われている方々の中で、私みたいな理由から集うようになった者は、場違いというか、なんとも心苦しく緊張しました。でも歌うことの大好きな私は、歌える楽しみもあり、せっせと通いました。祈りやメッセージ、そして聖歌を通して、みことばが心に染み込んでくるのを感じ、満たされた気持ちで帰る日も次第に多くなってきました。

その一方で、帰宅するや、家族との団らんは上の空でイエス様のことばかり考え、そこにのみ平安を求めて聖書を読みふけるか、テープを聴くかしている主人を見ると、昼間、吉祥寺であんなに喜んで過ごせるのに、なぜか息詰まる思いもしていました。

このような時は、みことばも拾い読みしては、自己流に解釈して気持ちをさらに落ち込ませておりました。「わたしは、平和をもたらすために来たのではなく、剣をもたらすために来たのです」（マタイ 10:34）とか、「さらに、家族の者がその人の敵となります」（マタイ 10:36）とのみことばに触れた時には、イエス様は平安を与える方なのに家庭や家族をバラバラにすると言っている。イエス様を知らなかった時の方が私たちの家族は平穏だったのに、なぜこのような心の不安定な生活をしなくてはならないのかと、平安を味わうどころではありませんでした。

でもこうした私に対しても、イエス様は、いろいろの機会を通じて忍耐強く語り続けてくださいました。

たとえばベックさんは「君子はもうイエス様に愛されているよ」「聖書に書いてあることは、人間にはできないよ。だから、イエス様に

ただごめんなさいと言って頼ればいいんだよ」などと話してくださいました。また集会の方々も、私の悩みを本当に根気よく聞いてくださり、「信仰を持つと、試練に遭う」と勝手に思い込んで怖がっていた私に、「いまあなたが置かれている状態が、イエス様からの立派な試練ではありませんか」と指摘されてほっとしました。

子どもたちも、私の様子を見て心配していたのでしょう。「お父さんはもう戻らないと思う。そんなにイエス様とライバルになっても仕方ないじゃない。お父さんは気を遣う人だから、人に話したら心配すると思って目に見えない神様に頼るのだから。お母さんはお母さんの歩みでゆっくり行けばいいと思うよ」と励ましてくれました。

こうした中で、私の気持ちも少しずつ変えられてきました。信仰の歩みを行きつ戻りつし、本当に自分は救われたいのか、救われたくないのか、それを曖昧にさせている心の奥に根を張るものは何なのか。これこそ自分を守ろうとする「自己中心の罪」であること。そして私には本当に愛がないのだと感じ始めたのです。

愛のない者に、神はわかりません。なぜなら神は愛だからです。（1ヨハネ　4·8）

あるのは自己中心の愛であって、自分にとって大切なものを取られる嫉妬心は神様に敵対さえしていたのです。よくわからなかった主人の言う「罪の問題」が次第に明らかにされてくるにつれ、自分自身にぞっとさせられるようになりました。このような私の罪こそ十字架の贖いがなければ解決できないのであって、イエス様は、私にこそ必要なお方であると思わされるようになりました。肉体的に病める人だけが、イエス様を必要としていて、元気な人にはイエス様は必要でないと思っていた。こんな高慢な生き方をしてきた私にこそ、イエス様は必要だと声をかけてくださっていたのに、その御声が長い間耳に入りませんでした。

しかももっと悪いことに、このように30年以上も私たちの家族を恵みの中に入れてくださり、守ってくださっていたイエス様の存在を知らされた後も、心から感謝もしないで、なお自分にしがみついている愚かな私が見えてきました。なんとわがままで自己中心のかたまりなんだろうと。夫婦だから信仰の歩みも一緒であってほしいと思いつつも、いっこうにイエス様と向き合おうとせず、主人ばかり見てあせっていた私。この世の生活ばかりにこだわり続けていた私。次第に、なんとかこの状態から抜け出たいと思う気持ちが強くなっていきました。

「よろこびへのコンサート」にはじめて参加して



そんな折りに、池袋のメサイア·コンサートで主を賛美する群れに加えていただきました。ちょうど集会に集い始めて1年半ほどしてのことでした。これを境に、渇ききっていた私の心に「日々の歌」43番の「呼びかけ」が、ビンビン響いてくるようになりました。「心の奥に主のみことば、響いてきたらすぐ従おう。『来なさい』と主イエスは招かれる。重荷をおろしていのちの中に」と一日中口ずさんでいたのです。

見よ。主の御手が短くて救えないのではない。その耳が遠くて、聞こえないのではない。あなたがたの咎が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなり、あなたがたの罪が御顔を隠させ、聞いてくださらないようにしたのだ。（イザヤ　59·1、2）

こんな私に対してもイエス様は、「そのままでもいいから、すぐ来なさい」と呼んでいてくださると思わされるようになり、受洗を決意しました。そして初めて集った田園調布の家庭集会から満3年目の昨年11月2日、御代田の福音センターで受洗の恵みにあずかりました。

こんなかたくなな私も罪を赦されて、新しく生まれ変われたのだと思うとほっとして、言いようもない喜びがわいてきました。

あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。（エペソ　2·8）

受洗までに主に従えるように聖書を理解し、心を整えていかなければと、また自分の思いで自らを窮屈にした時期もありましたが、それも必要ないことで、ただ赤子のように従えばいいのだということがようやくわかり、3年前、「受洗だけは、絶対一緒よ」と口走っていた私に、「その気になるまでいつまでも待つよ」と言ってくれていた主人と一緒に恵みにあずかりました。

かつてイエス様なしでも夫婦の間に平安さえあればよいと思っていた私ですが、イエス様にそれぞれつながっての夫婦にこそ、本当の平安が与えられると実感できるようになりました。一度は解かれたように感じた夫婦の結び目も、新しく結び合わされたような気がします。そろって主の側に立ち、イエス様に従い、永遠のいのちをいただいたこの喜び。これこそ真の平安であり、祝福だと思いました。

まだまだ自分の思いで行動することの多い私です。でもイエス様は「決して見捨てない」と言ってくださっています。その導きに頼って一歩一歩歩んでいきたいと思っています。

主のみこころだけがなりますように

吉野　千鶴子

1954年生まれ。静岡女子商業高等学校卒。お茶の水タイピスト専門学校卒。静岡印刷（株）就職。1981年吉野茂さんと結婚。長男文敏さん、次男正孝さん。

「吉野さん、吉野さん」という看護婦さんの呼びかけに、私は虚ろに目を開けました。「日々の歌」の賛美の歌声が、かすかに耳に入ってきました。

私は、最新医療を施した顕微鏡のくり抜き法で、主が与えてくださった主治医と執刀医のもと、最善の方法で、5月20日、無事乳がんの手術を終えました。7センチの腫瘍を摘出し、転移する確率の高い肺への転移もありませんでした。

思えば2年前、夫の女性問題が発覚し、1年前より別居に至り、以来悲しくて寂しくて泣き明かしておりました。そんな私に、主は、「日々の歌」の賛美を聞くようにといざなってくださいました。それらの歌に、自己憐憫にうちひしがれそうになる私の心は、どれだけ平安の内に守られたことでしょうか。私の感情を大切にするのではなく、主のみこころだけがなりますようにと聴きいっていました。そして、なんと病院側の配慮で、手術中にまで、私のリクエストである「日々の歌」のCDを流していただけたのでした。手術のお礼をドクターに申しますと、「ぼくじゃないよ。そのCDのおかげだと思うよ。」とおっしゃいました。

右胸に大きなしこりを見つけ、「がんかもしれない」と思ったその日から、いろいろなことを通して、自分の思いや行動を捨て、目にみえない主に頼ったとき、いつも主は最善を体験させてくださることを知りました。お見舞いくださった多くの方々、そして祈り、千羽鶴、「生きよ」と主の愛のメッセージが強くせまってきました。

13年前に、親の相続で調停まで持ち込み喧嘩別れした、夫の実姉喜代美さんも、毎日朝晩お惣菜を持って病室を訪ねてくださいました。夫の実兄勝義さんも来てくださいました。喜代美さんとは、いろいろお話する中で、喜代美さんの今かかえている問題を知れば知る程、イエスさまの愛を知ってほしいという思いがつのってきました。そしてふと「ドイツよろこびの集い」にいっしょに参加できたらいいなあと思いました。そして祈りました。

6月25日なんとその祈りが現実のものとなったのです。手術後

左、吉野さん、右、小川さん



1か月足らずの私が、喜代美さんと「ドイツよろこびの集い」に参加できたのです。成田でパスポートを忘れたことに気づき、東京まで戻ったりといろいろな事がありましたが、主は、出発前にくださった「安心して行きなさい」（ルカ 7･50）のみことば通り、すべてを主の方法で備え、守ってくださいました。ドイツでは、ゆったりとした時間の中、主の愛の中に集う方々に囲まれ、なんと毎日が喜代美さんの涙と笑顔の連続だったのでした。

主に感謝します。ただただ主に感謝します。ああ私が、がんにならなかったら、夫との別居がなかったなら、この喜びは味わわせていただけなかったでしょう。喜代美さんと共に抱き合って和解し、共に主を賛美できるとは。

わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。―主の御告げ。―それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。（エレミヤ 29･11）

天が地よりも高いように、わたしの道は、あなたがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い。（イザヤ 55･9）

帰国後、ドイツの景色とともに喜代美さんと一緒に写った写真を見ながら、こんなふうに屈託のない顔をして喜ぶ日が、いつか



ドイツよろこびの集いに参加して

夫も救われる日が、主の約束を信頼してすべてを主におゆだねした時、主の定めた時に必ず来るんだと思ったら、涙がぽろぽろとこぼれました。

わたしの口から出るわたしのことばも、むなしく、わたしのところに帰っては来ない。必ず、わたしの望む事を成し遂げ、わたしの言い送った事を成功させる。　（イザヤ　55・11）

恐れていた抗がん剤投与も始まりましたが、副作用の吐き気などもなく、不思議なくらい守られています。主のお約束を信じきって、主のしてくださったことを証ししながら、祈りつつ歩んで参りたいと願っています。

小川　喜代美

1948年生まれ。静岡女子商業高等学校卒、村松会計事務所勤務、70年結婚。夫芳生さん、長男正人さん、長女久美子さん。

私は夫の女性問題で何年も悩み苦しみ、淋しくつらい毎日を過ごしていました。そんな時、義妹が、同じ問題をかかえていることを知り、とても心が痛み、覚悟を決め電話をしてみました。といいますのも、私たち兄弟は母の遺産相続のことから、13年間親交がとだえていたのです。

電話の向こうの義妹は、心に私と同じ大きな問題をかかえているのに、とても元気で明るく、しっかりした声でした。それで会ってみたくなり、2か月後、13年振りに再会しました。お互い13年間の空白が一気に埋められてしまいましたが、義妹の「私、乳がんになってしまったの。」という言葉には、びっくりし、戸惑ってしまいました。彼女は、心にそんな大きな悩みをふたつもかかえているのに、とっても明るく、しっかりしていたのです。

慰めようと電話した義姉の私が、反対に慰められ、涙、涙でした。私と彼女の違いはいったい何だろう。性格、考え方、環境、それとも信仰を持っている者と持っていない者の違いだろうか。不思議に思え、あれこれ考えました。

乳がんの手術後1ヶ月して、キリスト集会の「ドイツよろこびの集い」に誘われました。気分転換のつもりで、お誘いにのってしまいました。

そんな軽い気持ちで参加させていただきましたら、義妹がパスポートを忘れてしまうというハプニングがあり、ドイツのミヘルスベルグというだけしか知らない私だけが、キリスト集会というまったく知らない、イエスさまを信仰している人々の中に入って、ひとり先に行くこととなりました。

出発した時は、心配と心細さでどうなることかと思いましたが、キリスト集会の方々は、初めてお会いしたようには思えず、最初からすぐ打ち解けることができました。そして旅行中、明るく親切にいろいろな事を教えていただきました。

緑豊かな大自然の田舎ミヘルスベルグに泊まり、次第に心がゆったりとなごんできました。初めて聞く賛美の歌、聖書のお話は、心に響くものがあり、今までの自分の32年間の結婚生活がいろいろ思い出され、涙があふれて止まりませんでした。

「少し自分を解放したら」「もうそんなにがんばらなくてもいいよ」「一生懸命よく働いたね」と、多くの方々が、語りかけてくださいました。ある方が私に、

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」
（マタイ 11・28）

と書かれたカードをくださいました。そのみことばが深く心に響き、涙がとまりませんでした。私の心は、くたくただったのです。

ベックさんは、「幼子のような素直な気持ちで、『ありがとう。ごめんなさい。』とただ祈ればいいんだよ。」と言ってくださいました。

毎日夕食が終わった後で、多くの方々と語り合い、今までの胸のつかえもとれ、とても楽になりました。

ドイツは、国全体がガーデニングを施したように美しく、ウルム、ハイデルベルグのきれいな町並み、心あたたかな集会の方々、そして言葉は通じなくともとってもあたたかなドイツの方々、泣いたり笑ったり歌ったりのとても楽しい旅でした。それは、私のまったく知らなかった世界でした。

ドイツ旅行から帰って、私は毎日聖書を読むのが日課となりました。

メッセージ当番表（10月— 12月）

見よ。わたしはシオンに、選ばれた石、尊い礎石を置く。彼に信頼する者は、決して

	10月				11月			
	5日	12日	19日	26日	2日	9日	16日	23日
北海道	重田H	川股	中山Y	杉本	芳竹	加藤S	羽石	武井
青森	キャンプ	佐山		笠井	藤田E	キャンプ		福島
仙台／盛岡	キャンプ	松田	松見	深沢	奥	キャンプ	高田	須藤Y
新潟		山下		江藤		富田	鈴木T	
宇都宮	藤井	谷口	御任	鈴木H	川股	金井	見目	谷口
日立／土浦／大洗	南村	植野	平山	和田S	松田	柿沼Y	松見	羽石
川越	代田	飯島H	川股	古田K	野口T	白石Y	御任	江田
春日部	川股	藤井	鈴木H	小々馬	西村	御任	吉田	大庭
印旛／鹿島	岩崎	会沢	笠井	松尾	伊牟田	大野	染野	槙野
市川	小西	田中J	滝	小川	大場	岩崎	伊牟田	会沢
東京 10:20	白石K	平山	野田	飽戸	ベック	池田D	辻田H	菊池
東京 14:00	小島	水渡	久田	松見	富岡	岡本M	石塚	古田稔
東京 19:00	黒沢	辻	大須賀	古屋	松田	中山Ch	中村K	野口H
横浜	田中J	和田Y	酒井M	黒沢	兵藤	立之	牧野	山田K
相模原	江藤	神沢	石井A	加藤S	飽戸	代田	菊池	旭
御代田	若山	片桐	河辺	水渡	植原	末永	岩崎	松下
伊那	植原	末永	田中J	久田	若山	重田S	平井	清水Y
富山	吉田	野口O	柿沼Y	青柳	平	仲井間	富田	松本Y
高山	大下		新井		吉田		大下	
藤枝		内藤		野田		菊池		石塚
掛川	酒井M		金子		秋本		大塚	
蒲郡	野田	小西	岩本	新井	三五	会沢	河辺	辻田H
名古屋／豊橋	滝	酒井M	今村	山科	新井	和田Y	会沢	津田
石川／福井		青柳（11）※		重田S（25）				
近江八幡		古田K					青柳	
大阪	大場	那須	広田	酒井Ch	内田	森島	小久保	渡辺S
芦屋	森島	小久保	伊牟田	吉田	滝	瀬島	清水Y	新井
西神	飽戸	渡辺S	岡本M	池島	小久保	滝	小川	内田
島根			福代				キャンプ	
山口／広島／徳山	山口H	笠井	香川	森島	上田	渡部Y	キャンプ	瀬島
岡山	内田H	広橋	近森	藤原T	久田	野間	渡辺S	河野
高松／徳島	山本	広田	会沢	野間	青柳	笠井	広橋	後藤
高知	鈴木T	岡本H	飯守	大須賀	近森	青柳	池田D	伊野
松山／西条	和田Y	野間	藤原N	北原	光藤	江藤	近森	岡本M
福岡／別府	浅野	別所	加藤M	庄野	重枝	山口H	滝	小山田
長崎／佐世保	別所	辻田H	染野	加藤M	辻田M	別所	庄野	浅野
宮崎／小林	藤原N	上野	武井	河辺	岩本	染野	平山	桜本
鹿児島／熊本	庄野	江藤	須藤T	平山	石塚	古田M	重枝	加藤M
沖縄／宮古	飯守	重田S	江藤	崎浜	仲井間	松見	平良M	芳竹
石垣		重田S		喜屋武			崎浜	
米国／カナダ								和田Y
グアム			古田M				古田M	キャンプ
バンコク				石井A	平山			
中国								
喜びの集い	4-5			20-29		8-9	15-16	22-25
	八戸			フィリンゲン		仙台	島根	バンコク
祈り会（7:30PM～）	2	9	16	23	30	6	13	20
	野田	重田S	田中J	清水Y	和田Y	小島	水渡	杉本
ヨハネ	5. 1-3	5. 4-5	5. 11-12	5. 9-10	5. 11-13	5. 14-15	5. 16-18	5. 19-21

新しい集会：高山

ニューフェイス：藤田匡（吉祥寺）

◆各集いの準備担当者は、参加者リスト（ローマ字の氏名も）を事前にベックさんへEメールで送ってください。アドレスは、gotth

※ 当番表の石川／福井の項目で、担当者名の横に記入した数字は福音集会の開催日です（日曜に会場を確保できず、前日の土曜に開くものです）。

させられることがない。（Iペテロ 2:5）

12月				
30日	7日	14日	21日	28日
中山Y	藤原N	岩崎	中山Y	岩下
		大場		中山Ch
増森	立之	蘇畑	川股	菊池
キャンプ	柿沼M	笠井		重田H
羽石	見目	野田	吉田	御任
吉田	キャンプ	上村	藤田T	藤田E
大庭	岩上	重田S	上野	内藤
小西	宮田	野口O	会沢	辻
山口I	滝	末村	小西	小川
大沢	田尾	飽戸	鈴木T	小島
古田K	酒井Ch	藤本	重田S	青柳
蘇畑	高村	岩本	染野	江藤
小々馬	柿沼Y	旭	佐山	田中J
柿沼M	中山Ch	菊池	寺田	黒田
酒井M	松見	内藤	山田K	立之
山田M	平井	長岡	羽石	ベック
織田	片桐	山田M	長岡	山田M
キャンプ	江藤	織田	山下	大下
新井		大下		吉田
		芝田		小林
	染野		岩上	
清水Y	倉橋	清水N	大高	白石Y
松本S	辻田H	田中J	今川	上田
重田S (29)	長岡 (6)			
		吉田		
山科	池島	水渡	中山K	寺田
長岡	羽石	高村	池島	中山K
小山	田中J	藤田T	森島	久田
森田		瀬島		黒田R
秋本	芳我	杉本	岡本M	森田
内田H	鈴木T	キャンプ	後藤	福島
池田	中山K	キャンプ	小野沢	河野
窪内	金子M	キャンプ	古田K	池田J
広田	白石K	キャンプ	内藤	古田K
野田	中野	今村	キャンプ	岩本
山口H	浅野	北原	キャンプ	加藤M
庄野	古田K	高橋I	キャンプ	菅原
和田Y	上野	羽石	キャンプ	浅野
青柳	蘇畑	喜屋武	岩崎	代田
	平良M			芳竹
			古田M	

29-30	6-7	13-14	20-21	31-1/2
新潟	大洗	徳島	福岡	御代田
27	4	11	18	25
芳竹	牧野	佐山	山本	大須賀
IIヨハネ 1-3	4	5-6	7-11	12-13

_beck@hotmail.comです。　※Eメールを使えない場合は速達で郵送してください。

キリスト集会のメッセンジャーの兄弟と各集会の責任ある兄弟 へ

こうして、キリストご自身が、ある人を使徒、ある人を預言者、ある人を伝道者、ある人を牧師また教師として、お立てになったのです。それは、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためであり、ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身たけにまで達するためです。（エペソ 4·11-13）

尊き主の御名を心より賛美いたします。毎週火曜日に行われておりますベック兄の学びは、信者にとって信仰の成長のためにたいへん役立つものです。しかし、多くの兄弟方が仕事や地理的な事情のためにお聞きになることができないのは残念です。そこでベック兄とご相談の上、ベック兄の学びの録音テープを適宜、メッセンジャーの方々ならびに各集会の責任者にお送りすることになりました。

この学びのテープが大いに用いられ、日々の信仰の糧として、またメッセージを準備されるに当たっての参考としていただけますように願っております。どうかお一人おひとりの上に主のお導きと祝福が豊かにありますようにお祈りいたします。

2003年10月
重田定義



メッセージ当番表（1月— 3月）

すべての祈りと願いを用いて、どんなときにも御霊によって祈りなさい。
そのためには絶えず目をさましていて、すべての聖徒のために、忍耐の限りを

	1月				2月			
	4日	11日	18日	25日	1日	8日	15日	22日
北海道	重田H	川股	中山Y	杉本	加藤S	芳竹	羽石	武井
青森		佐山		笠井	キャンプ		藤田E	福島
仙台／盛岡	高田H	松田	松見	深沢	キャンプ	増森	高田	奥
新潟		山下		江藤		富田		鈴木T
宇都宮	藤井	谷口	御任	鈴木H	川股	金井	見目	谷口
日立／土浦／大洗	南村	槙野	平山	和田S	松田	柿沼Y	松見	羽石
川越	代田	飯島H	川股	古田K	野口T	白石Y	御任	重田S
春日部	川股	藤井	鈴木H	小々馬	西村	御任	吉田	大庭
印旛／鹿島	岩崎	会沢	笠井	松尾	伊牟田	大野	染野	植野
市川	小西	重田S	滝	小川	大場	森田	伊牟田	会沢
東京 10:20	白石K	平山	野田	飽戸	池田D	重田S	辻田H	菊池
東京 14:00	小島	水渡	久田	松見	富岡	岡本M	石塚	古田稔
東京 19:00	黒沢	辻	大須賀	古屋	中山Ch	松田	中村K	野口O
横浜	和田Y	田中J	酒井M	黒沢	兵藤	立之	牧野S	山田K
相模原	江藤	神沢	石井A	重田S	飽戸	加藤S	菊池	旭
御代田	ベック	片桐	若山	水渡	植原	末永	岩崎	松下
伊那	末永	植原	田中J	久田	若山		平井	清水Y
富山	吉田	柿沼Y	野口O	青柳	平	仲井間	富田	松本Y
高山	大下		新井		吉田		大下	
藤枝		内藤		野田		キャンプ		石塚
掛川	酒井M		金子		秋本	キャンプ	大塚	
蒲郡	野田	小西	岩本	新井	三五	キャンプ	河辺	辻田H
名古屋／豊橋	滝	和田Y	今村	山科	新井	キャンプ	会沢	津田
石川／福井	植原							長岡
近江八幡		古田K					青柳	
大阪	大場	那須	広田	酒井Ch	内田	森島	小久保	キャンプ
芦屋	森島	小久保	瀬川	吉田	滝	瀬島	新井	キャンプ
西神	飽戸	渡辺S	岡本M	池島	小久保	滝	内田	キャンプ
島根			福代					
山口／広島／徳山	山口H	笠井	香川	森島	上田	渡部Y	藤原T	瀬島
岡山	広橋	内田H	近森	内藤	久田	野間	渡辺S	内田H
高松／徳島	山本	広田	河野	後藤	青柳	笠井	広橋	伊野
高知	鈴木T	岡本H	飯守	ベック	近森	青柳	池田D	池田J
松山／西条	内田H	野間	藤原N	河野	光藤	江藤	近森	北原
福岡／別府	浅野	別所	キャンプ	庄野	重枝	山口H	滝	小山田
長崎／佐世保	別所	辻田H	キャンプ	加藤M	辻田M	別所	庄野	浅野
宮崎／小林	藤原N	上野	キャンプ	河辺	岩本	染野	平山	桜本
鹿児島／熊本	庄野	江藤	キャンプ	平山	石塚	古田M	重枝	加藤M
沖縄／宮古	飯守	キャンプ	江藤	平良K	仲井間	松見	平良M	芳竹
石垣		キャンプ		喜屋武			平良K	
米国／カナダ								和田Y
グアム					キャンプ			
バンコク				石井A	平山		キャンプ	
中国								
喜びの集い		10-11	17-18		31-1	7-8	14-17	21-22
		沖縄	熊本		グアム	名古屋	バンコク	神戸
祈り会		8	15	22	29	5	12	19
(7:30PM～)		野田	藤原N	重田S	青柳	清水Y	小島	酒井Ch
II ヨハネ		9-11	12-13	III ヨハネ1-2	3-4	5-8	9-15	ユダ 1-2

◆各集いの準備担当者は、参加者リスト（ローマ字の氏名も）を事前にベックさんへEメールで送ってください。アドレスは、gotthold_beck@hotmail.comです。
ニューフェイス：瀬川進吾（芦屋）、高田博之（高松）、平良啓（宮古）

、また祈りなさい。(エペソ 6:18)

	3月			
29日	7日	14日	21日	28日
中山Y	藤原N	岩崎	中山Y	岩下
キャンプ		大場		中山Ch
キャンプ	立之	蘇畑	川股	菊池
	柿沼M	笠井		重田H
羽石	見目	野田	吉田	御任
吉田	キャンプ	槙野	藤田T	藤田E
大庭	岩上	江田	上野	内藤
小西	宮田	重田S	会沢	辻
山口I	滝	末村	小西	小川
大沢A	田尾	飽戸	鈴木T	小島
古田K	酒井Ch	藤本	青柳	染野
蘇畑	高村	岩本	野口H	江藤
小々馬	柿沼Y	旭	田中J	佐山
柿沼M	中山Ch	菊池	寺田	黒田
酒井M	松見	内藤	山田K	立之
山田M	平井	長岡	羽石	野口O
織田	片桐	山田M	長岡	山田M
植原	江藤	織田	山下	大下
新井		大下		吉田
		芝田		小林
	染野		岩上	
清水Y	倉橋	清水N	大高	白石Y
松本S	辻田H	田中J	酒井M	上田
				重田S
		吉田		
山科	池島	水渡	中山K	寺田
長岡	羽石	高村	池島	中山K
小山	瀬川	藤田T	森島	久田
岩崎		瀬島		黒田R
秋本	芳我	杉本	岡本M	田中J
福島	鈴木T	藤原T	後藤	キャンプ
池田	中山K	野間	小野沢	キャンプ
窪内	金子M	大須賀	古田K	キャンプ
広田	白石K	和田Y	内藤	キャンプ
野田	中野	キャンプ	加藤M	岩本
山口H	浅野	キャンプ	染野	加藤M
庄野	古田K	キャンプ	武井	菅原
上野	和田Y	キャンプ	須藤T	浅野
青柳	蘇畑	喜屋武	岩崎	代田
	平良M			芳竹
			キャンプ	

28-29	6-7	13-14	18-23	27-28
仙台	大洗	別府	バンクーバー	高知
26	4	11	18	25
杉本	芳竹	牧野S	佐山	山本
3	4	5-10	11-13	14-15

※Eメールを使えない場合は速達で郵送してください。

2004年 よろこびの集い

1 January
- 12月31日－2日　御代田（1日:コンサート）
- 10日－11日　沖縄
- 17日－18日　熊本
- 31日－ 1日　グアム

2 February
- 7日－ 8日　名古屋
- 14日－17日　バンコク
- 21日－22日　神戸
- 28日－29日　仙台

3 March
- 6日－ 7日　大洗
- 13日－14日　別府
- 18日－23日　バンクーバー
- 27日－28日　高知

4 April
- 3日－ 4日　大阪
- 9日－11日　御代田
- 17日－18日　沖縄
- 24日－25日　宮崎

5 May
- 1日－ 3日　御代田
- 8日－ 9日　札幌
- 15日－16日　富山
- 22日－23日　福岡
- 29日－30日　宇部

6 June
- 8日－15日　ドイツ（ミヘルスベルグ）
- 16日－23日　ドイツ（ミヘルスベルグ）

7 July
- 3日－ 4日　盛岡
- 10日－11日　金沢
- 16日－18日　御代田
- 23日－25日　御代田
- 30日－8月1日　御代田

8 August
- 6日－ 8日　御代田
- 13日－15日　御代田
- 20日－22日　御代田
- 27日－29日

9 September
- 1日－ 9日　ドイツ（フィリンゲン）
- 11日－12日
- 16日－21日　ロサンゼルス
- 24日－26日　御代田

10 October
- 2日－ 3日　八戸
- 9日－10日　近江八幡
- 16日－17日　島根
- 30日－31日　松山

11 Novenber
- 5日－ 7日　御代田
- 13日－14日　沖縄
- 20日－23日　バンコク
- 27日－28日　福島

12 December
- 3日－ 5日　御代田
- 11日－12日　徳島
- 18日－19日
- 31日－1月2日　御代田（1日：コンサート）

よろこびの集いでは、日曜日の朝食後
集会前の30分間、祈り会をしましょう。








あおぞ

いま、そこにある危機

先号に続いて、こどもたちを取り巻く「ごく身近にある危険」についてお話しましょう。

今回のテーマは、「いじめ」です。

悪魔は「いじめられるという試練」に働くだけではなく、「いじめられたときに動く、自分自身の心の中」に、働きかけてくるのかもしれません。

やさしい　M君

M君は、とてもまじめな、やさしい子です。

やさしい子ほどいじめられやすい、とよく耳にします。

どんなにやさしく、まじめな子でも、げんかいをこえるほどの、かなしいできごとにあうとき、危ないところを通らされるのだということ。

また、いじわるされるかなしさを知っていても、いじわるしてしまう弱さがあるということ。

M君は、ゆうきをもって、正直にお話してくれたのです。

僕も　いじめられたのに

そんなM君が6年生になってから、R君のクラスの学級崩壊の話をいっしょに聞いていたとき、ふとM君が話しはじめました。

「いじわるされてる子がいると、いけないってわかってるんだけど、つい、いっしょに、いじわるするほうに入っていることがある・・・。あやまりに行くこともあるけど、そのままのこともあるし・・・。自分が、いじめられたことがあるのに、人といっしょになって、嫌がらせしてしまうなんて・・・。」

M君はこれ以上、ことばが見つからず、ぽたぽたと涙をおとしました。いっしょにいたみんなも、胸がいっぱいになって、だまって祈りました。

こころが　ちぎれるとき

3年生のとき、M君は、いじめにあいました。

『あまり、スポーツがとくいでない』という、かんたんな理由で、ばかにされたり、なかまはずれにされたり、いろいろな嫌がらせをうけるようになったのです。

お母さんが先生に言ってくれて、いちど、いじめはなくなりました。

でもしばらくすると、また嫌がらせがはじまって、どんどんエスカレートしていったのです。

M君は、ずっとがまんしました。

M君は、もともと、きもちのやさしい子なのです。

もんくを言ったり、反抗したりすることもできず、ただただ、だまって、がまんしていたのです。

あるとき、4人の友だちに、机を廊下にはこび出されました。

廊下で、机の中のものをすてたり、机の上にのってさわぐ友だちを見て、今までおとなしくがまんしてきたM君の中で、なにかが切れてしまいました。



らひろば

M君は、廊下におとされた自分のハサミやコンパスをひろって、それを持ったまま、友だちを追いかけまわしたのです。

先生が、あわてて止めに入ってくれましたが、いっぽまちがえれば、お友だちにたいへんなケガをおわせてしまったかもしれません。

止められたときのM君は、ゆるせないきもちでいっぱいで、そして、自分のことだか、友だちのことだか、わからないけれど、こわくて、こうふんして、ふるえが止まらなかったそうです。

イエスさまの　つらさは

M君は、泣きながら言いました。

「少―しずつ、少―しずつ、ゆるしていった。・・・でも・・・すぐにまた、おもいだして・・・ゆるせないきもちになる。・・・イエスさまは、これ以上に、つらい経験したんだ・・・って・・・。まだ自分は、らくなんだ・・・ゆるしてあげなくちゃ・・・って、そのとき、祈ったんだ。」

あふれる　めぐみ

これは、M君のお母さんからきいた話です。

M君のようちえんからのお友だちに、Oさんという女の子がいました。

あるとき、M君のことをしんぱいしたOさんのお母さんが、M君のお母さんをおうちに呼んでくださいました。

お母さんが出かけていくと、Oさんのおうちで、見おぼえのある本を目にしました。

『実を結ぶ命』です。

びっくりしてたずねると、むかし、大学の先生から、いただいたそうです。

先生はクリスチャンではないけれど、

「よい本なので、よんでごらんなさい。」

と、くださったそうです。

「私、この集会に行っているのよ。」

とM君のお母さんがお話すると、とてもびっくりされていました。

このできごとをきっかけに、Oさんのお母さんも、しぜんにイエスさまを信じる人へと、かえられていきました。

イエスさまは、M君にとってはくるしい「いじめ」というできごとをとおしても、Oさんのお母さんにまで、愛をくださったのです。

泣きやんだM君は、えがおで言いました。

「さいきん、ぼくのおじいちゃんが、息をひきとる少しまえに、イエスさまを信じたんだ。ぼくは、自分のひどさも知らなかったら、おじいちゃんと　イエスさまのお話は、できなかったかもしれない。」

そういうわけで、私たちはいつも心強いのです。ただし、私たちが肉体にいる間は、主から離れているということも知っています。

（2コリント　5･6）

子どもたちの写真やエピソード、お待ちしてます!!

原稿募集　各地で日曜学校のお世話をされている方々、また子育て奮闘中の皆様からの原稿をお待ちしています。（子どものプライバシー保護の意味合いも含めて、基本的に執筆者、エピソード提供者の名前は載せません。）子どもたちの、ふとしたつぶやきから教えられたこと、ドキッとさせられたこと、思わず吹き出してしまうような、ユーモラスなエピソードなど、お寄せください。なお、紙面の都合上、編集して一部を掲載させていただくこと、全員分をご紹介できないこともありますが、ご了承ください。

送付先　181-0005　三鷹市中原3-1-55　清水洋一
e-mail :yoichimoyota@yahoo.co.jp



KAKUCHI NO SYUKAI KARA

各地の集会から

from ICHIKAWA

こちら市川集会で～す

「恐れてはならない。……この戦いはあなたがたの戦いではなく、神の戦いであるから。……あなたがたとともにいる主の救いを見よ。」（2歴代　20・15、17）

1984年夏、軽井沢キャンプでベックさんが「市川で礼拝を始めましょう」と言われました。突然のことばに驚いたと同時に、恐れや「礼拝者は集まるだろうか、続けていけるだろうか」という不安が私たちの心を占領しました。イエス様は冒頭のみことばをお示し下さり、事実イエス様ご自身が先頭に立ってその約束どおりに導いて下さいました。初めての礼拝はその年の12月1日の日曜日でした。「クリスマスに向けて12月の第1週に1本のろうそくに光がともされます。2週目に2本、3週目に3本、そしてクリスマスには光がいっぱいになりますよ」と、ミンヘンさんがやさしい笑顔で語られたのを忘れたことはありません。イエス様はそのとおりに市川集会を光で満たして下さいました。

心を一つにして宮に集まり、家でパンを裂き、喜びと真心をもって食事をともにし、神を賛美し、……主も毎日救われる人々を仲間に加えてくださった。（使徒　2・46、47）

一年を過ぎた頃には家庭での礼拝はもう狭くなるほど人が集まるようになり、祈りによって近くの幼稚園に導かれました。園児用の小さなイスに座っての礼拝でした。ベックさんが「みんな幼子のようになりましょう」と言われた最初のメッセージによって、私たちは心洗われる思いでした。エアコンもなく、夏は扇風機と蚊取り線香をたいての腰の痛いたいへんな集会でしたが、イエス様はみことばのとおりますます多くの人を集められました。

さらに1年が過ぎ、より大きな礼拝所を求めて祈りました。導かれた所は国道沿いで駐車場もある恰好な場所でした。大家さんは私たちを温かく迎えて下さり、契約書も保証金も礼金もなしに、すぐに快く諒解して下さいました。イエス様がお与え下さった礼拝所であると確信し、深く感謝しました。これが現在の礼拝所です。その後も大家さんは、ご好意で多くの人が座れるように床を直し、イスを増やし、使いやすいようにトイレも改修して下さいました。すべてがイエス様の御手によるものと、ただ感謝するばかりです。

これまで20年の間、市川集会に起こされたイエス様の恵みはあまりに多く、とても語り尽くせません。初めに与えられたみことばのご真実に圧倒されるばかりで「主は生きておられる」とおおいに喜ぶ集いとなりました。イエス様が毎日救われる人々を仲間に加えてくださるように、祈り、交わり、主の導きに従う集いでありたいと思います。（小川　一夫）

礼拝・福音集会	毎日曜日午前10:30～
日曜学校	中高生午前10:00～　小学生以下午前11:00～
家庭集会	市川・稲毛・柏・北松戸・茂原
祈り会	県内数カ所で行われています

ごいっしょに祈りましょう。

「実を結ぶ命」現代中国語版の翻訳と現地印刷について

がんで天国に召されたベックさんの四女、リンデさんの生涯と信仰をつづった「実を結ぶ命」は、多くの国で読まれ、広く主に用いられていますが、いま韓長慶さん（芦屋集会）の手で、現代中国語への翻訳が進行中です。



翻訳が完了し次第、現地印刷の許可申請をする予定です。主のお守りにより、この出版計画が実現して、多くの中国人に福音が伝えられますよう、祈りましょう。



ローゼさんご夫妻が日本で金婚式

長年、日本のキリスト集会と信者のため祈ってくださっているドイツのクラウス・ローゼさんがマルグレト夫人と8月に来日、西軽井沢国際福音センターで金婚式のお祝いを受けました。花束を贈られたローゼさんは「愛する主にある兄弟姉妹、どうもありがとうございます」と挨拶。聖書のみことば（第一コリント13章4–8節）を引用して「これは主イエス様の愛の現われです。主だけにご栄光がありますように」と語られました。

Wedding 結婚式


9/21 小池 克明・純子


9/23
小林 一主・由布子


4/4 武井 幹夫・徳江


4/12
村上 正樹・美由紀


5/3 藤田 匡・信子


9/15 瀧本 泰之・真澄


9/13 廣本 典幸・知恵


5/5
豊田 泰助・彩奈


8/24
小池 正悟・久美子


8/18
前田 基守・由美


8/9
井山 保彦・さおり


8/2
森田 忠志・ほほ


7/19
八幡 俊洋・牧子

あなたのみことばは、
私の足のともしび、私の道の光です。
詩篇 119・105

結婚式と葬儀のご報告





4/01 村井 司
4/18 橋本 静
4/19 武尾 昇
4/30 寺門 節子
5/01 佃 近雄
5/06 阿部 基
5/19 渡辺 行雄





Funeral 葬儀

しかし、今やキリストは、眠った者の初穂として
死者の中からよみがえられました。 Iコリント 15·20











5/26 唐沢 八生子
6/01 岡本 弘
6/03 安藤 芳雄
6/09 荻野 源太郎
6/16 加藤 玉代
6/17 鈴木 洵子
7/05 中越 信栄
7/24 皆川 みや子
7/29 富田 智子
8/07 荻原 貞治
8/30 菊池 實
9/18 斎藤 アイ



Bananen Brot mit Walnuß

クルミ入り
バナナブレッド

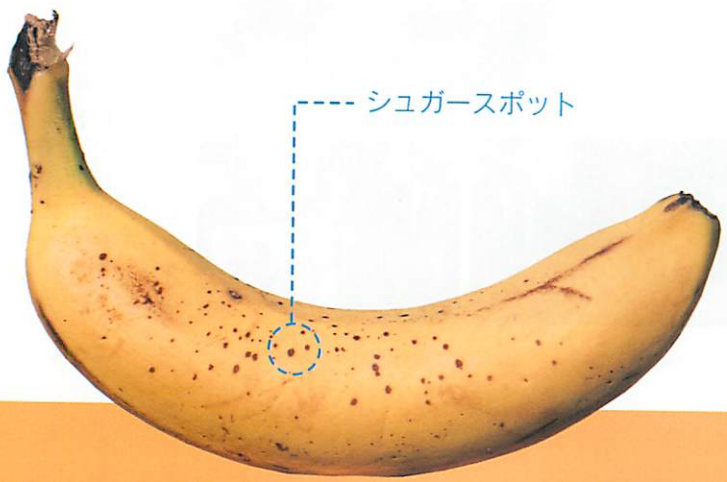


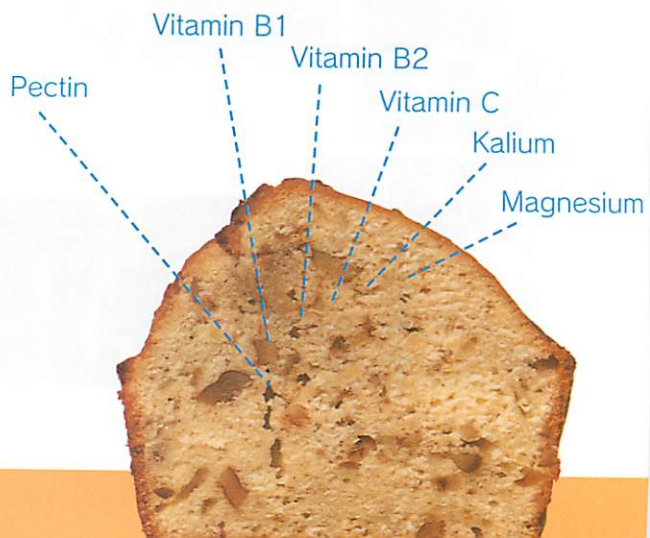
手軽に作れて持ち運びに便利
バナナとクルミのパワフルおやつ

今回はバナナブレッドを紹介しましょう。ほんのりとしたバナナの風味、クルミとの相性も良く、しっとりとした口当たり。おやつだけでなく、朝食にもおすすめです。

材料のバナナは一年中手に入り、値段が安く使いやすいうえに、ビタミン、ミネラル、食物繊維が豊富です。黒い斑点（シュガースポット）が出てきた、良く熟したバナナを使うと風味が増します。また、クルミの代わりにチョコチップを入れて焼いても、おいしくでき上がります。

強力粉を使うので、ずっしりと量感のある仕上がりになり、薄力粉を使うふわっとしたケーキよりも持ち運びに便利で、アウトドアにも向いています。やわらかい日ざしの中、あたたかい飲み物とバナナブレッドでティータイムを楽しんでみてはいかがでしょう。





材料

《すべて常温にしておく》

強力粉　200g
ベーキングパウダー　小さじ1.5
砂糖　100g
塩　少々
バター（有塩で良い）80g
卵（全卵・大1個程度）80g
牛乳　大さじ4
バナナ（正味）160g
レモン汁　小さじ2
むきくるみ　45g



《下準備》

a. むきくるみは包丁で細かく刻んでおく
b. 粉はベーキンウパウダーと合わせてふるっておく

道具

パウンド型 --- ここでは 17.5cm×8.5cm の型を使用しています
（エンゼル型でも良い）

作り方



《バナナの下準備》

1. バナナをフォークの背でつぶす
多少粒が残る程度にしておく



2. レモン汁と砂糖の半量を加えて混ぜ、室温で置く
ポイント レモン汁はバナナの変色を防ぎ、砂糖はバナナになじませる



《生地を作る》

3. 常温でやわらかくなったバターを泡立て器で練る



4. 砂糖を少しずつ入れ、良く混ぜる（数回に分けて入れると良い）
ポイント この段階でふっくら白っぽくなるまで丁寧に混ぜる



5. 塩をひとつまみ入れる。

6. 卵を入れ混ぜる。



7. ふるっておいた粉とベーキングパウダーを入れ、木ベラなどでさっくりと混ぜ合わせる



8. 牛乳を入れて混ぜ、置いておいたバナナを入れて混ぜる



9. くるみを入れて混ぜ合わせる



10. バター等（分量外）を塗った型に生地を入れ、180℃のオーブンで40分位焼く
ポイント 竹串を刺して生地が付いてこない ことを確認　※ エンゼル型の場合は、火が通りやすいので時間を短かめに



11. 焼き上がったら、熱いうちに型から出して冷ます
ポイント 冷めると型から抜けにくくなります



Bananen Brot
mit Walnuß

本の紹介



実を結ぶ命 がんにうち勝ったドイツ少女リンデ

ゴットホルド・ベック編著　330円

二十歳そこそこのドイツ少女リンデが、がんであることを知りながら、自分の死をかくも冷静に受け入れることができ、すべてを感謝し、自分の思いは少しも求めずに、喜びつつ召されていったというこの事実は、現代の奇蹟であり、神の実在を証しする一つの大きな証拠です。
「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した」（エレミヤ31・3）リンデの、主に従い通す態度は、キリスト集会の中に生き生きとしたリバイバルの波を起こし、多くの人々が自分の支配権をイエス様に明け渡し、そしてただ神のみことばにのみ拠り頼む者へと変えられています。なおこの本は韓国語版、ドイツ語版、英語版が出版されました。さらに病床にあって本の読めない方々のために、PBAのアナウンサー渡辺康子さんが朗読したテープ（8本1組）があります。

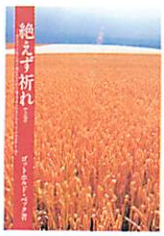


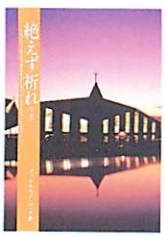


なにものも私たちを神の愛から引き離すことはできない（上・下巻）

ゴットホルド・ベック著　各300円

吉祥寺キリスト集会でのベックさんの聖書の学びのうち、「ローマ人への手紙」1章から8章までを上巻に、9章から16章までを下巻にまとめたものです。聖書に初めて接する方、信仰の歩みを始めた方のために分かりやすく書かれていて、全体は第1章から順を追って学ばれていますが、一つ一つのメッセージが深い霊的な内容を持ち独立しているため、どこから読み始めても、豊かな恵みが私たちの心に注がれます。私たちが神様のみことばに目覚め、救われるためには、たった一つの聖句でも十分でした。しかし、さらに成長していくためには、多くのみことばが、聖書全体が必要です。この本は、聖書を「研究」するためにではなく、日々の生活においてさらに深く主のみことばを味わいたいと願っておられる方々のために、すばらしい励ましとなると信じております。





絶えず祈れ（上・下巻）

ゴットホルド・ベック著　上巻 400円／下巻 250円

主なる神は私たちが祈ることを望んでおられます。なぜなら主なる神はあふれるばかりの祝福を私たちに注ごうとしておられるからです。祈りこそ神の富のための鍵なのです。そして信仰は、祝福が私たちのうえに注がれるとびらをあけるのです。祈りのほんとうのたいせつさをよく知ることができれば、まだ救われていない方々はイエス様のみもとに導かれ、また、すでに救われている方々は、いまよりもさらにさらに何倍も何倍もイエス様に祈るようになるにちがいありません。そして、私たちが主に祈るための励ましとなるのが、この「絶えず祈れ」の上巻であり、下巻です。「絶えず祈れ」、「まことの祈り」、「祈りへのまねき」、「真剣な祈り」、「祭司としての奉仕」、「イエスのみ名によって祈る」、「祈りのかぎりない可能性」などのメッセージが収められています。



すぐに起こるはずのこと「ヨハネの黙示録」（第1～3巻）

ゴットホルド・ベック著　　第1巻 300円／第2巻 250円／第3巻 400円

ヨハネの黙示録は、初代教会で何よりも大切にされました。しかし黙示録の内容と文章は、現代の私たちには難解なところがあり、誤読も多く、霊的に正しく読み解くことは困難になっています。しかし、この黙示録の中にこそ、末の世にある私たちにとって、何よりも必要なことが示されているのです。私たちはこの黙示録に、もっと注意を向け、深く深く読みこむべきではないでしょうか。この本は、吉祥寺キリスト集会の婦人のための学び会で、約1年半ほどの間に行われたベックさんのメッセージをまとめたもので、第1巻には黙示録の1、2、3章、第2巻には4～7章、第3巻には8～15章が収められています。この「すぐに起こるはずのこと」は、引き続いて次々に刊行されていく予定です。



光よあれ「私たちは主のもの」証しシリーズ（第1～9集）

第1集 330円／第2集 350円／第3集 330円／第4集 350円／
第5集 380円／第6集 380円／第7集 400円／第8集 400円／
第9集 400円

いかにしてイエス様に出会い、救われたか、またそれによって、人生がどのように変わり、重荷から開放され、よろこびと平安の日々生きることができるようになったかを、多くの方々が証しされています。第1集から第9集まであり、実に596人の方々それぞれの人生と主にあるよろこびを感動的に語っておられます。このシリーズは第9集までで、すでに50万部を越えてひろく愛読されています。

本などの注文はハガキで

キリスト集会で発行している本、雑誌などの注文は下記へハガキでしてください。**電話での注文は、お控えください。**

注文先　〒180-0004 東京都武蔵野市吉祥寺本町4－9－11 吉祥寺キリスト集会

キリスト集会のご案内

キリスト集会には牧師制度はありません。
いろいろな職業のかたが自発的に責任を分かちあい、いっさいの強制はなく、純粋に聖書のみことばのみに立ち、
主だけを中心とする交わりを大切にするひとびとの集いです。

キリスト集会には役員会も、総会も、定例会議も、会則もありません。
みなが助けあって重荷を分かちあい、すべてが自発的によろこびをもってなされます。

会員として登録されるようないわゆる会員名簿にあたるものはありません。
出入りは自由であり、宗教団体的な制度はいっさい排除して、主ご自身のみを頭とし、
主ご自身のみが満ち満ちておられることを祈り求めている集会です。

月定献金、年定献金などの献金制度はなく、すべての献金は自発的に行われ、無記名です。
だれがいくらささげたかは主のみがご存じです。

日曜日の礼拝では、祈りと賛美がつぎつぎにささげられ、主の十字架のあがないの血潮を覚え、パンとぶどう液にあずかります。
あらかじめ決められたプログラムはなく、主に示されるままに各人が祈り、賛美します。
礼拝の後は福音集会で、兄弟によって主のみことばがとりつがれます。

家庭集会は、家庭で開かれる集会で、兄弟によるメッセージ、兄弟姉妹による証しがあり、
福音の喜びをつたえる集いです。世界で百箇所以上あり、多くのところで日曜礼拝が行われます。

「よろこびの集い」は、西軽井沢国際福音センターはじめ世界各地で開かれ、全国のひとびとが集まる大きな集会です。
快適で経済的な宿泊施設を利用し、ほとんど毎週どこかで開かれます。

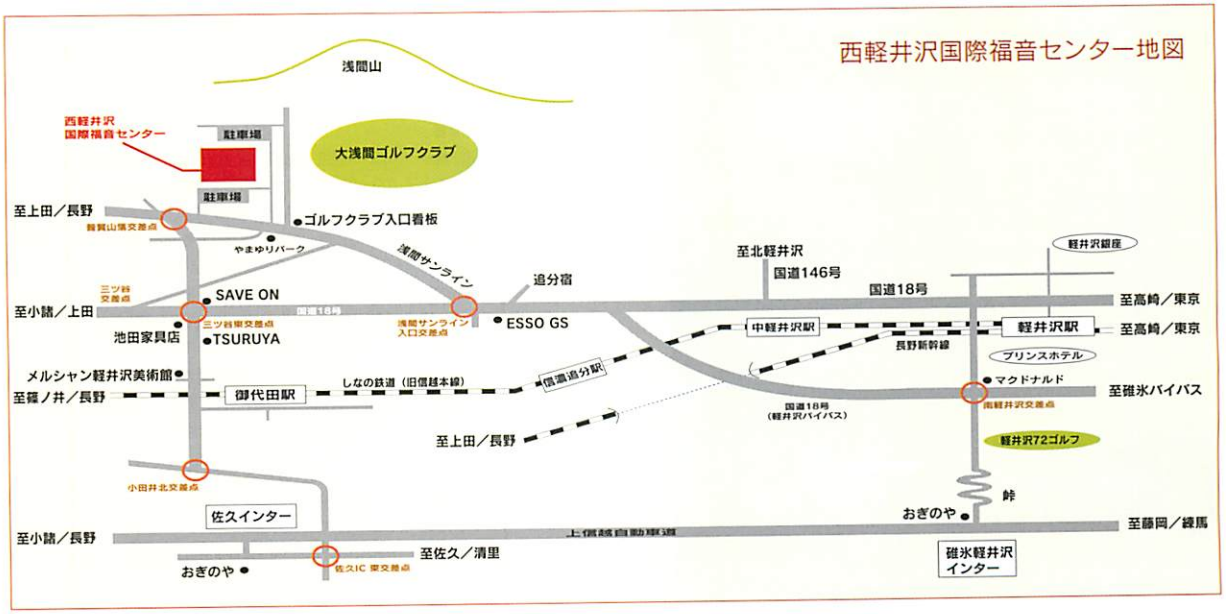
吉祥寺キリスト集会
東京都武蔵野市吉祥寺本町4-9-11 〒180-0004
［電話］ 0422-21-8450（集会所）

日曜礼拝	10:30／14:00／19:00
日曜福音集会	12:00／15:00／20:00
火曜学び会	11:00
木曜祈り会	19:30
子供日曜学校	9:00
中高生日曜クラス	9:00

吉祥寺キリスト集会地図



西軽井沢国際福音センター地図



西軽井沢国際福音センター
［電話］0267-32-6400㈹
長野県北佐久郡御代田町塩野450-15 〒389-0201

西軽井沢国際福音センター・ゲストハウス
［電話］0267-32-6444
長野県北佐久郡御代田町塩野450 33-〒389 02-01

■しなの鉄道で御代田駅下車。
タクシーで約5分（1000円程度）徒歩約45分＝3km
御代田へは東京駅より長野新幹線「あさま」にて軽井沢駅下車、
しなの鉄道に乗り換えて3つ目の御代田駅下車。
■周辺の道路に車を駐車させることは禁止されていますので、
厳重にお守りください。